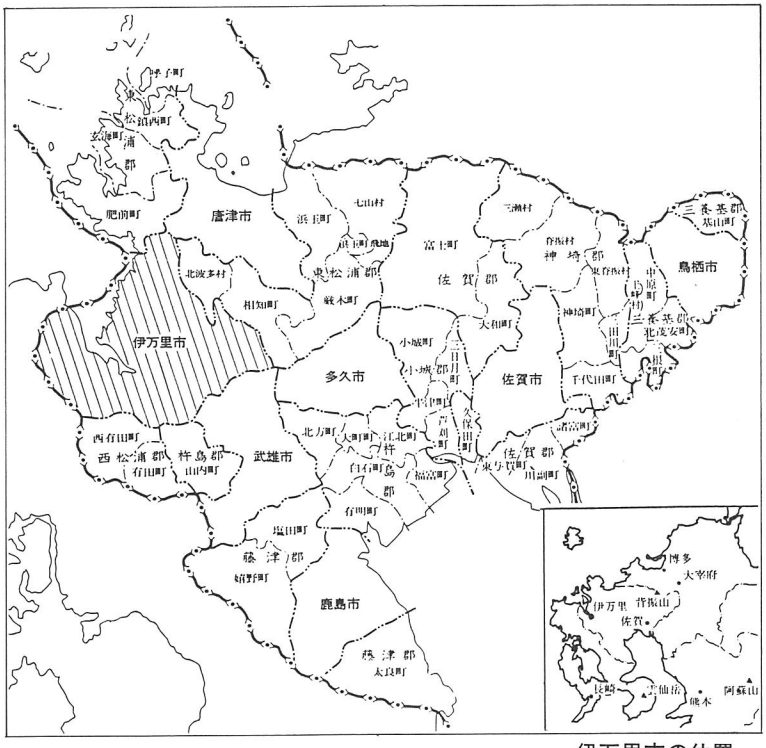
伊万里市文化財調査報告書第24集
伊万里市内古窯跡調査報告第５集

金石原窯辻窯跡・焼山上窯跡
焼山中窯跡・市の瀬高麗神上窯跡



伊万里市の位置

1988. 3

佐賀県伊万里市教育委員会

伊万里市文化財調査報告書第２４集正誤表

頁	行	誤	正
本文目次	３２	焼山中窯跡の調査・・３７	焼山中窯跡の調査・・３６
挿図目次	左10	碗・香炉・壺・皿	碗・香炉・壺・蓋・皿
挿図目次	左18	焼山上窯跡地形図（$\frac{1}{200}$）	焼山上窯跡地形図（$\frac{1}{200}$）
挿図目次	右4	突帯・片口底部拓影	突帯・片口・底部拓影
挿図目次	右6	地形図（$\frac{1}{200}$）・・・３６	地形図（$\frac{1}{200}$）・・・３７
4		Ｆｉｇ４地形図上位の水田を畑に訂正する	
１０	１９	９の、高台は低くの断面	９の、高台は低く断面
１１	２０	擂鉢（３５、４１）	擂鉢（３５、４３）
１１	２７	窯道具（４４～４２）	窯道具（４４～７１）
２０	１	この窯の位置する川原地区	この窯の位置する川原地
２３	６	・・・水平矩離・・・・・	・・・水平距離・・・・・
２５	１３	・・ともに銭釉・・・・・	・・ともに鉛釉・・・・・
２５	１６	・・底部は碁笥底風で・・	・・底部は碁笥底風で・・
２５	１８	鉄奨が鉛釉を・・・	鉄奨か鉛釉を・・・
２５	１９	鉄奨が鉛釉を・・・	鉄奨か鉛釉を・・・
３８	１１	・・同上復元・・・・・・	・・図上復元・・・・・・
４５		市の瀬高麗神上窯地形図	市の瀬高麗神上窯跡地形図
４７	２０	６４～６６は・・・・・・	６４・６５・６７は・・

序

江戸時代、鍋島藩唯一の港湾都市として栄えた伊万里には、我国近世陶磁の至宝と賞賛される『鍋島』を創出した大川内鍋島窯跡に代表される磁器の窯跡のほかに、当地で『高麗焼』と呼称される陶器の窯跡が多数所在しております。これらの窯跡の内容解明は、郷土伊万里の歴史や文化を理解するうえで重要であるとともに、肥前地域の陶磁史を解明するうえでも大変に貴重であります。

今度の『市の瀬高麗神上窯跡』をはじめとする古窯跡の調査では、従来まで不明確であった中世末期から近世初頭および前半にわたる陶器生産窯の構造や規模・焼造品の内容を知る手掛りを得ることができました。

今私達は、これらの窯跡を保護し子孫に残すとともに、現代の社会生活の中で正しく理解し、地域の学術・文化の向上に活用していくことが必要であると考えております。

今回報告します「市内古窯跡調査報告第５集」は、昭和62年度、国・県の補助事業として実施したものです。多々不備な点があろうかと思いますが、本書が広く市民各位の文化財保護思想の高揚と郷土理解の資料として活用されれば幸甚このうえもありません。

最後に、この調査にご協力を頂いた、文化庁・県文化課・地元の方々に厚くお礼を申し上げます。

昭和63年３月

伊万里市教育委員会

教育長　黒　木　淳　吉

例　　言

1．本書は昭和58年度から国庫補助事業として実施している「市内古窯跡群詳細分布調査事業」の第５年次目（昭和62年度）に実施した調査の概略報告書である。

2．調査は国庫、県費の補助を受けて伊万里市教育委員会が実施した。

3．本書は昭和62年度調査対象分の

・金石原窯辻窯跡（かないしはらかまんつじ）　（伊万里市松浦町大字中野原字金石原4669イロ，4671，4671－１）

・焼山上窯跡（やきやまかみ）　（伊万里市大川町大字川原字辻5478，5480，5487）

・焼山中窯跡（やきやまなか）　（伊万里市大川町大字川原字辻5493）

・市の瀬高麗神上窯跡（いちせこうらいじんかみ）（伊万里市大川内町谷馬米一，4204イロ）

の確認調査の成果を中心に作成した。

4．調査は伊万里市教育委員会社会教育課文化係が実施し、調査員は文化係、文化財専門員盛峰雄があたり、同専門員船井向洋が協力した。

5．本書の執筆編集は盛があたり、片岡史子　山口艶子の協力を得た。

6．事務局は伊万里市教育委員会社会教育課長　井手正範が総括し、文化係長　小山恒彦、文化係　盛、船井があたった。

7．調査によって出土した遺物は伊万里市教育委員会が保管の任にあたっている。

8．今回調査した窯跡の県教育委員会登録略号は以下のとおりである。

金石原窯辻窯跡	Ｋ・Ｉ・Ｔ	焼山上窯跡	Ｙ・Ｙ・Ｋ
焼山中窯跡	Ｙ・Ｙ・Ｎ	市の瀬高麗神上窯跡	Ｉ・Ｋ・Ｋ

9．本書は伊万里市文化財調査報告書第24集にあたる。

10．本事業については次の方々の協力を得た。（敬称略）

川本勲・川本トメコ・川本四郎・原英夫・野村藤利・前田芳江・中島法子・前川光次
池田順一郎・川原一治・川原速雄・川原和水・飯田亀次郎・前川マスエ・前川キクエ
松尾イサ

凡　　例

1．本書中に使用した周辺窯跡分布図及び、各窯跡の周辺地形図は座標北であるが他は磁北である。

2．本書中の出土遺物実測図中の通し番号右側の文字は出土地点及び層位をあらわす。
例えば「A表」はAトレンチ表土、「モノⅡ」はモノハラⅡ層、「I砂」はI室砂床、「Aカク」はAトレンチ撹乱層の略である。

3．本書中の図版の縮尺は不統一である。

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに……1
Ⅱ．金石原窯辻窯跡の調査……2
Ⅲ．焼山上窯跡の調査……19
Ⅳ．焼山中窯跡の調査……37
Ⅴ．市の瀬高麗神上窯跡の調査……43

挿図目次

Fig 1　各窯跡の位置……1
Fig 2　周辺窯跡分布図（1/25,000）……2
Fig 3　金石原窯辻窯跡周辺地形図（1/5,000）……3
Fig 4　金石原窯辻窯跡地形図（1/400）……4
Fig 5　Aトレンチ遺構実測図（1/60）……5
Fig 6　Bトレンチ遺構実測図（1/60）……7
Fig 7　Cトレンチ遺構実測図（1/60）……8
Fig 8　B2トレンチ西壁土層図（1/40）……9
Fig 9　出土遺物実測図・茶入・香炉・皿（1/2）…12
Fig10　出土遺物実測図・碗・香炉・壷・皿（1/3）……13
Fig11　出土遺物実測図・皿・片口・鉢・徳利・擂鉢・花立・甕・壷（1/6・1/3）……14
Fig12　出土遺物実測図・窯道具（ハマ・トチン・焼台・1/4）……15
Fig 1　周辺窯跡分布図（1/25,000）……19
Fig 2　焼山上・中窯跡周辺地形図（1/5,000）……20
Fig 3　焼山上窯跡地形図（1/2,000）……21
Fig 4　Aトレンチ遺構実測図（1/60）……22
Fig 5　Bトレンチ遺構実測図（1/60）……23
Fig 6　Cトレンチ遺構実測図（1/60）……24
Fig 7　出土遺物実測図・鉄絵皿・鉢（1/3）……26
Fig 8　出土遺物実測図・鉄絵皿・鉢・碗（1/3）…27
Fig 9　出土遺物実測図・蓋・徳利・脚付鉢・水指（1/3）……28
Fig10　出土遺物実測図・擂鉢・鉢・壷・甕・底部（1/4）……29
Fig11　出土遺物実測図・把手・耳・貼文・突帯片口底部拓影（1/3）……30
Fig12　出土遺物実測図・窯道具（1/4）……31
Fig 1　焼山中窯地形図（1/200）……36
Fig 2　Aトレンチ遺構実測図（1/60）……38
Fig 3　Bトレンチ遺構実測図（1/60）……39
Fig 4　出土遺物実測図（1/3）……40
Fig 1　周辺窯跡分布図（1/25,000）……43
Fig 2　市の瀬高麗神上窯跡周辺地形図（1/5,000）…44
Fig 3　市の瀬高麗神上窯跡地形図（1/200）……45
Fig 4　Bトレンチ遺構実測図（1/60）……46
Fig 5　出土遺物実測図・鉄絵皿（1/4）……48
Fig 6　出土遺物実測図・鉄絵皿（1/4）……49
Fig 7　出土遺物実測図・鉄絵皿・短頸壷（1/3）…50
Fig 8　出土遺物実測図・碗・花入・片口・鉢（1/3）……51
Fig 9　出土遺物実測図・皿・鉄絵皿（1/3）……52
Fig10　出土遺物実測図・皿・片口・香炉・向付（1/3）……53
Fig11　出土遺物実測図・擂鉢（1/4）……54
Fig12　出土遺物実測図・皿・鉢・窯道具（1/4）…55

市の瀬高麗神上窯跡現地説明会風景
（寒風の中130名の見学者はふるさとの歴史に目を見張った！）

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経過

伊万里市内には、我国近世磁器の至宝とされる「鍋島」を創出した大川内鍋島窯跡を代表とする磁器の窯跡のほか、李朝陶技の流れを受ける焼山古窯跡群や椎ノ峰古窯跡群に代表される陶器の窯跡があり、その分布総数は80有余箇所になり当地域の歴史的、地理的な特色を物語る重要な要素となっている。これらの窯跡のうち、構造・規模・焼造品の内容や年代等を理解する資料を収集しているのは、大川内鍋島窯跡や今回調査を実施した４箇所の窯跡を含めても13箇所にすぎず、他の多くの窯跡は現状での遺存状況の程度さえ不明のものが多数あり、各窯跡で焼造された製品の内容や技術的な特徴は一部の資料によってのみ理解されているものがほとんどである。

各窯跡の内容把握は当市の歴史・文化を解明するうえにおいても、また、肥前の陶磁史の流れを究明するうえにおいても不可欠であるばかりか、文化財の計画的な保護活用の推進からも重要な課題となっている。

今回確認調査を実施した４古窯跡はいずれも限られた資料により、古陶器の窯としてその存在は旧来から知られていたが窯体の規模・構造・焼造品の内容や遺存状況等に関しては不明な点が多く、その解明の為の基礎資料の収集を目的として昭和62年９月25日から11月６日金石原窯辻窯跡、11月11日から12月17日焼山上・中窯跡、63年１月６日から２月10日市の瀬高麗神上窯跡の発掘調査を実施し、何れも期間中に現地説明会を行ない市民に広く公開し62年度事業を終了した。

2．調査組織

１．調査主体	伊万里市教育委員会		
２．調査委員長	教育長	黒木	淳吉
３．調査委員	伊万里市文化財保護審議会委員		
	田中時次郎	原口	静雄
	下平　恒男	前山	博
	森　醇一朗	金子	信二
	辻　　悟	吉永源三郎	
	木原　武雄	志佐	惲彦
４．調査員	文化係	盛	峰雄
５．事務局長	社会教育課長	井手	正範
局員	文化係長	小山	恒彦
局員	文化係	盛	峰雄
局員	文化係	船井	向洋

Fig．1　各窯跡の位置

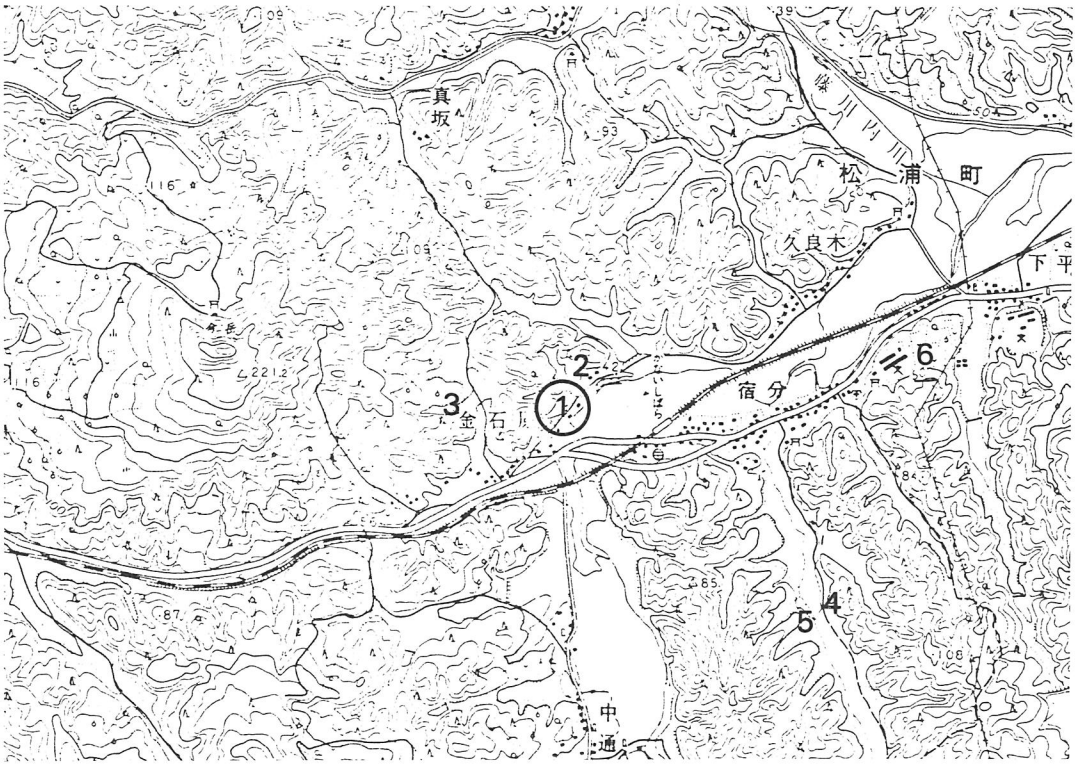


Fig.2 周辺窯跡分布図($\frac{1}{25,000}$)　① 金石原窯辻窯跡　3 広谷窯跡　5 栗木谷窯跡　2 餅田東窯跡　4 鞍壺窯跡　6 鍋原窯跡

II. 金石原窯辻窯跡の調査

1. 遺跡の立地と環境

金石原窯辻窯跡(かないしはらかまんつじかまあと 註1)は、伊万里市松浦町大字中野原字金石原に所在している。松浦町は、伊万里市街地の東方6kmに位置し、松浦川とその支流である黒尾岳川により形成された狭小な谷平地を中心に展開する桃山時代末期から近世にわたる古窯跡(註2)の多い所である。町域の北辺には標高176mの国見岳が位置し南波多町との境をなし、西辺には標高221mの今岳が特異な山容を置き大坪町と隔てている。この今岳の東域や南域は、小河川により谷が刻まれ、標高100mほどの小丘陵地形が南東に向って発達している。これらの丘陵の先端域をかすめるように黒岳川が南から東に大きく流路を変える地点に接するように標高90mほどの小舌状丘陵が南東に向かって伸びている。

当窯跡の所在する金石原地区は、町域の西北端に位置する今岳から南方向に伸びた小舌状丘陵地形の先端域で、黒尾岳川に流入する小河川によりきざまれ形成された谷地に面した標高40mから50mに立地する戸数40戸ほどの小集落である。北西に今岳が位置し、その地勢は北に高く南に低く、集落の東端で流路を変える黒尾岳川に向かって小河川が谷を刻んで八ツ手状の

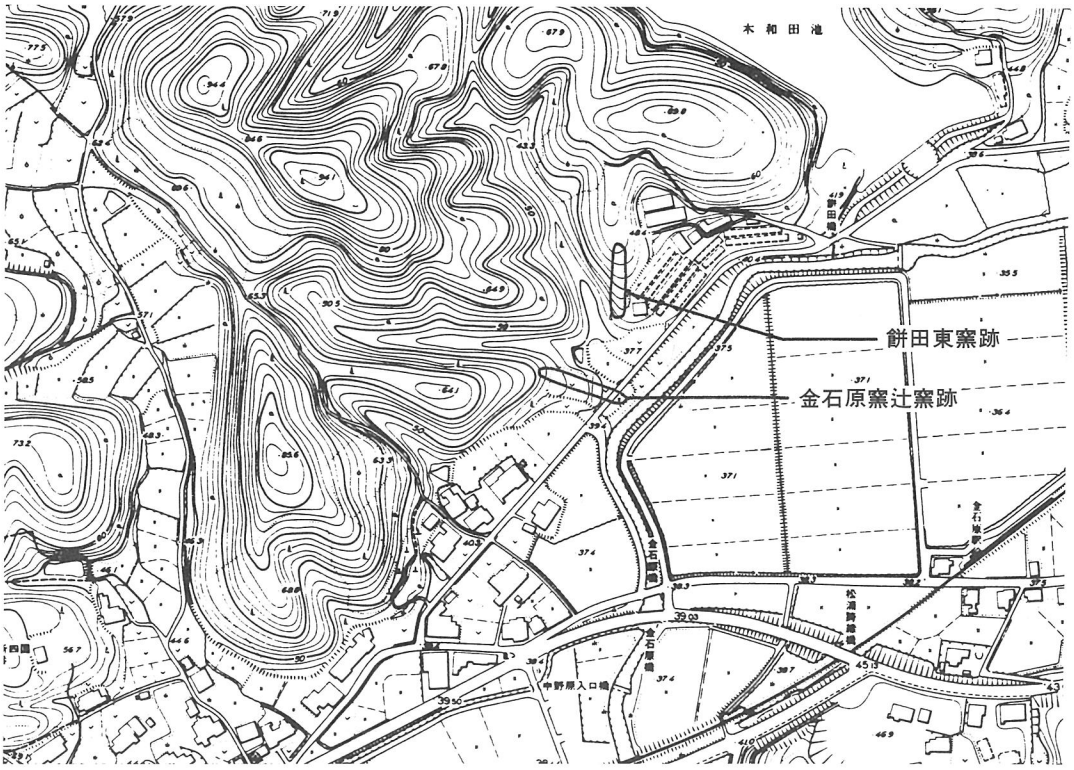


Fig.3 金石原窯辻窯跡周辺地形図($\frac{1}{5,000}$)

丘陵地形を形成している。

窯跡は、この北西から南東に向かって伸びた八ツ手状丘陵先端部中央の、標高39mから47mほどのところに丘陵の主軸に沿って位置している。

この窯跡の周辺には、谷を隔ててすぐ東側の丘陵上に当窯跡と同じような飴釉の徳利や碗を出土する餅田東窯跡[註3]があるほか北西には広谷窯跡がある。又、南東には鞍壷窯跡[註4]、栗木谷窯跡[註5]があり東方には鍋原窯跡[註6]がある。

註1．当窯跡に関する文献で最も早い例には大正10年8月発行の『西松浦郡誌』がありその中では「窯辻」とある。『佐賀県遺跡地図（杵西地区）』佐賀県教育委員会、1981等で使用されている「金石原餅田西窯跡」の呼称は地元では全く通用しておらず、「窯辻（かまくつじ）」とか「窯ん谷（かまん谷）」と呼ばれている。又、「餅田（もちだ）」という呼称は谷を隔てた東側であり（江戸時代からこの谷が村境となっていたという）大字山形に含まれ、当窯跡は大字中野原に含まれており「金石原餅田西窯跡」の呼称は歴史的な事実（歴史的な行政区画）と相違しているのが明らかなので今回は標記を「金石原窯辻窯跡」として統一した。

註2．昭和58年度に伊万里市教育委員会が実施した分布調査では、17箇所の窯跡が確認されている。このうち藤の川内茅ン谷1号窯跡（昭和62年3月16日佐賀県史跡に指定）と阿房谷下窯跡―『阿房谷下窯跡』1985伊万里市教育委員会―の発掘調査が実施されている。

註3．多くの文献では、当窯跡と餅田東窯跡を混用して金石原窯とされているが、餅田東窯跡で出土する青色の銅釉を施した製品をはじめ焼造品の内容に若干の相異がある。

註4.5.『古窯跡分布調査報告書』伊万里市教育委員会1984

註6．昭和59年に新たに確認された、主に甕類を焼造している江戸時代後期の窯跡で規模その他内容は不明。現在は畑地。

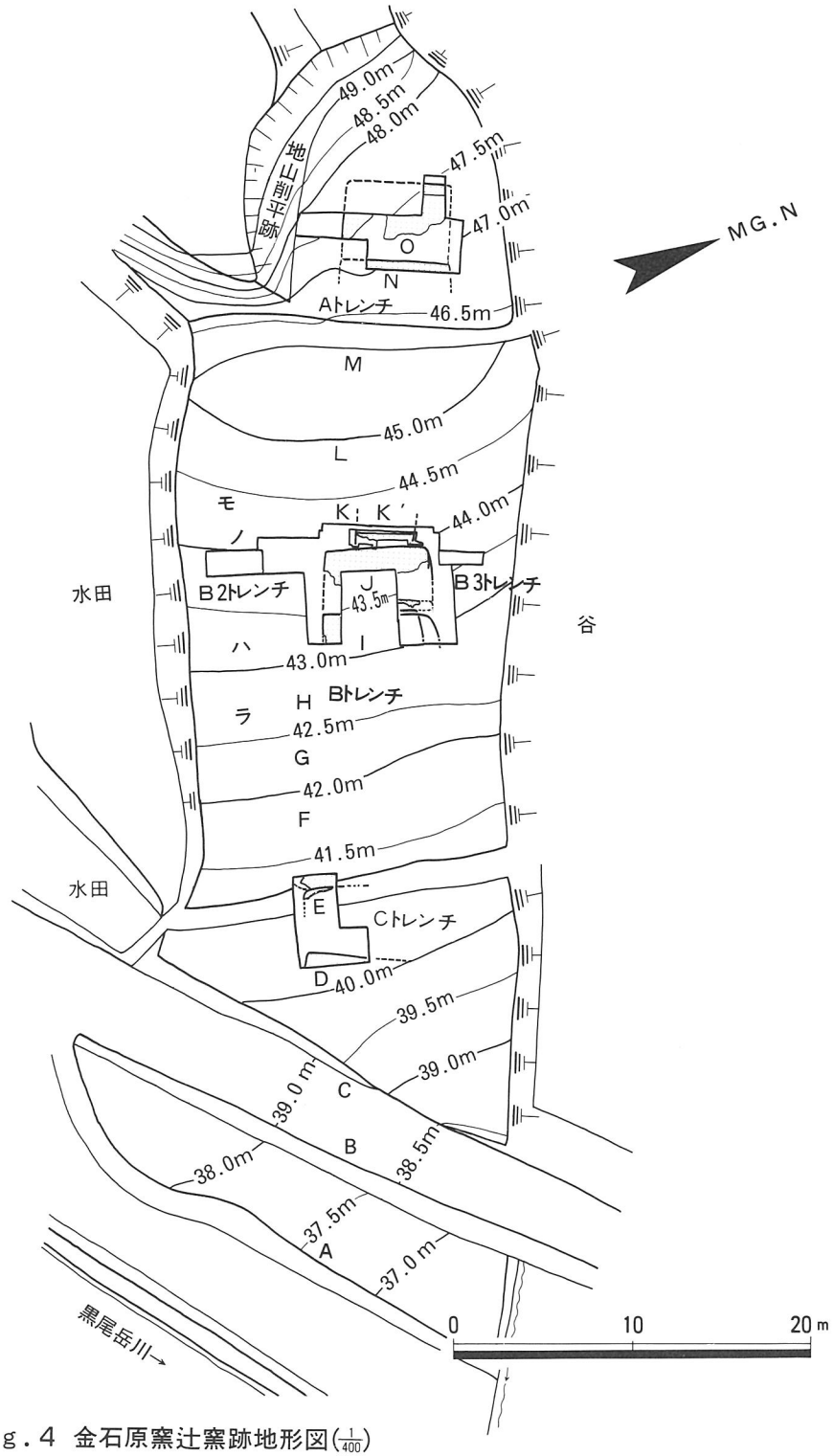


Fig.4 金石原窯辻窯跡地形図($\frac{1}{400}$)

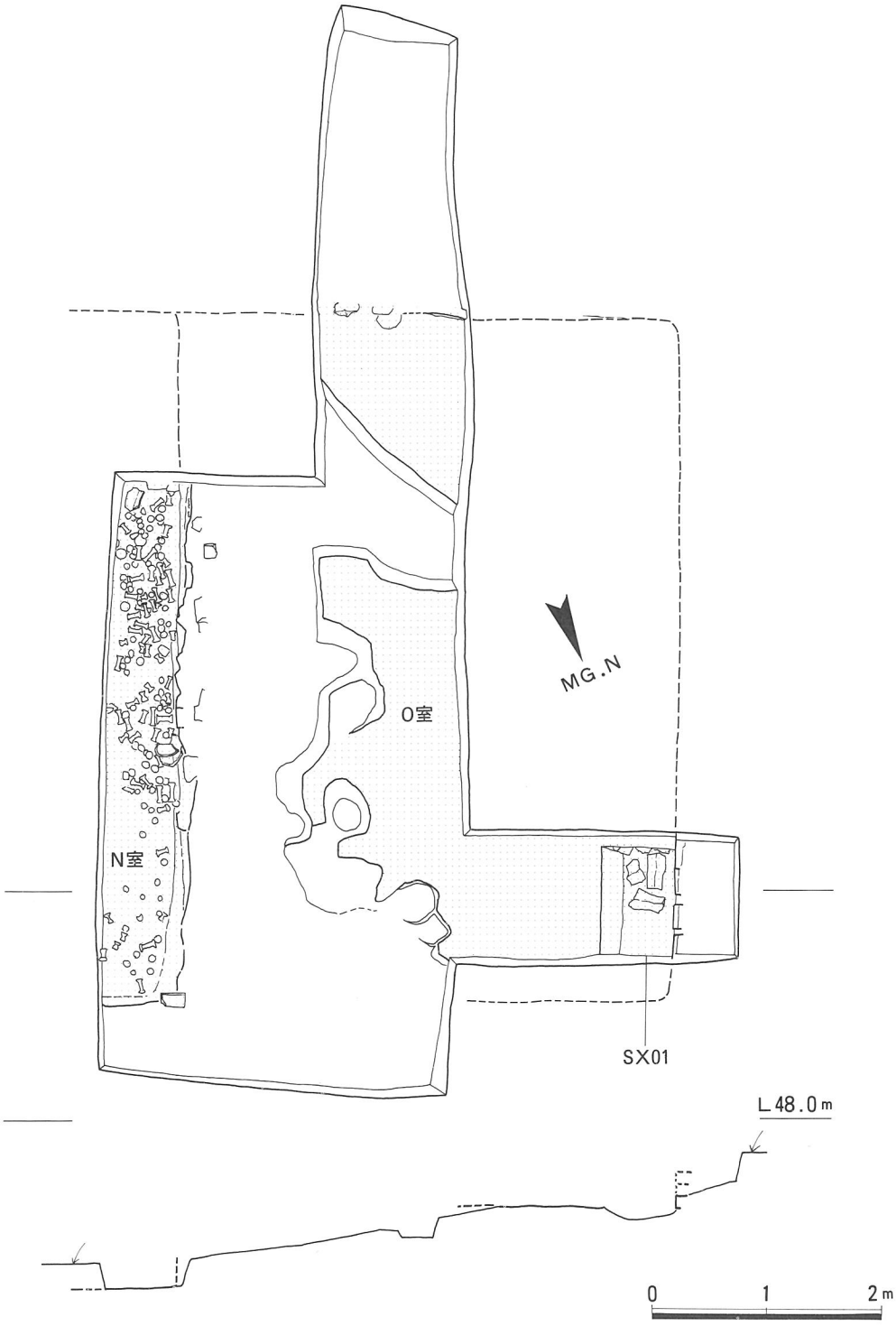


Fig.5 Aトレンチ遺構実測図($\frac{1}{60}$)

2．遺跡の概要

金石原窯辻窯跡は、これまで黒唐津の壷、徳利を出土する窯跡として知られていたが、その他の焼造品の内容や窯体の構造や規模に関しては何も判明していなかった。

窯跡は、西から東に向かって標高をさげながら伸びる丘陵の先端部の中央に丘陵の主軸に沿って位置している。現在は傾斜をもった畑地として三段に渡って開墾されており下位の窯室が存在するところには東西に道路が横断し、最上位の畑地と道路面との比高差は９ｍにも及んでいる。地表面には小さな陶片が散乱しているがあまり目立たない状況である。

3．調査の概要

調査は窯体の規模等を確認する為に任意にトレンチを設定して実施することとした。

まず、最上位の畑地の山側に残る高さ２ｍの崖面が窯を築く為に行なった地山削平跡と推定し、上位窯室の規模・構造を把握する為に南北に３×４ｍのAトレンチを設定した。その結果N室の奥壁の一部とO室の砂床の一部を検出した。さらに、O室の奥行と幅及び排水溝等の付属施設の確認をする為に南と西に調査区を拡張した、Aトレンチの成果により窯体の方向が判明したので、中位の窯室の状況を知る為に中段の畑地に２×10ｍのBトレンチを設定した。その結果J室の奥壁と砂床の一部を検出した。さらに、窯室の奥行と幅を確認する為に拡張した結果I室の左奥壁と砂床の一部を検出したが、奥壁右部分は耕作による撹乱が著しく窯室と火床の痕跡を確認したにすぎない。

Bトレンチの左側に物原の存在を確認するために１×2.5ｍのB２トレンチを設定した。その結果Ⅰ～Ⅳ層に及ぶ厚さ1.6ｍ以上の物原堆積層を確認した。窯体の右側にも１×2.5ｍのB３トレンチを設定したが、窯壁片を含む層を検出したにとどまった。A・Bトレンチの成果により、当窯体の左側壁の位置がほぼ推定できたので下位の窯室の状況を確認する為に2.5×５ｍのCトレンチを設定した。その結果、E室の奥壁左隅の部分とD室の奥壁の一部を検出することができた。最後にBトレンチで窯体の新旧重複が考えられたので、J室の奥壁部分（推定K室の火床にあたる範囲）を掘りさげK′室の火床の一部と火床境を検出した。

4．遺構の概要（Fig４）

当窯跡は畑地に立地しており、耕作による撹乱が著しく遺構の残存状況は良好ではなかった。

検出された遺構には、階段状連房式登窯の推定窯室15室の範囲のうち６室分があり、下位の窯室からD・E・I・J・N・O室の呼称を付した。検出したすべての窯室では奥壁と砂床の一部が残存していた。またE室の奥壁では通焔孔の下面の一部が残っていた。D室の奥壁からO室の奥壁面までの水平距離は43.16ｍ、窯体の傾斜角はD・J室間で約９°J・O室間で約12°で平均勾配は約10.5°である。D室の砂床面の標高は39.80ｍ、O室砂床面の標高は47.25ｍでその比高差は7.45ｍを測る。窯室のうちD室以下は地形から推定すると３室（胴木間を含む）ほどあると考えられるがO室より上位は、奥壁の被熱範囲が上方に広がらないことや、地形から推定して存在しないものと考えられる。

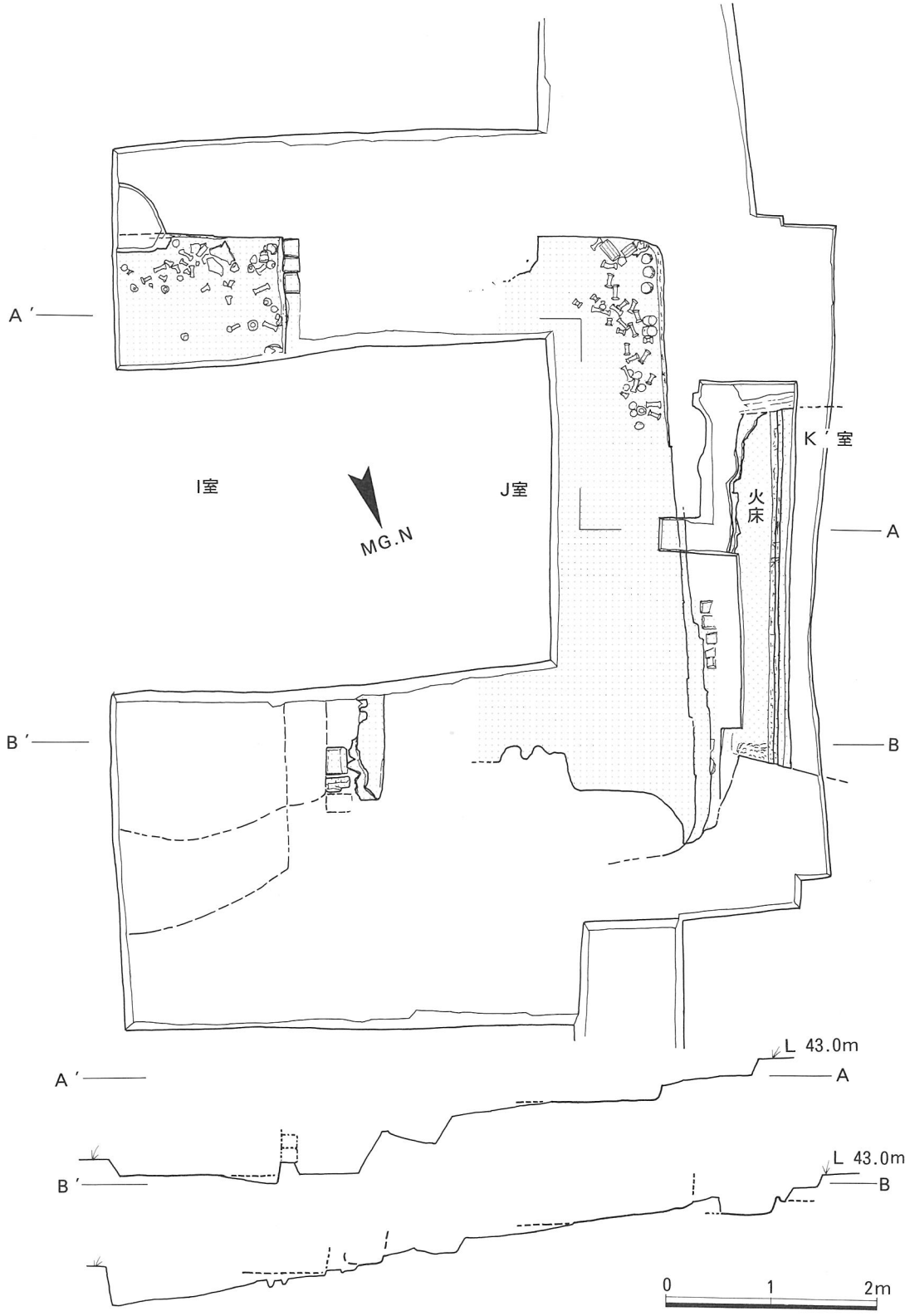


Fig.6 Bトレンチ遺構実測図($\frac{1}{60}$)

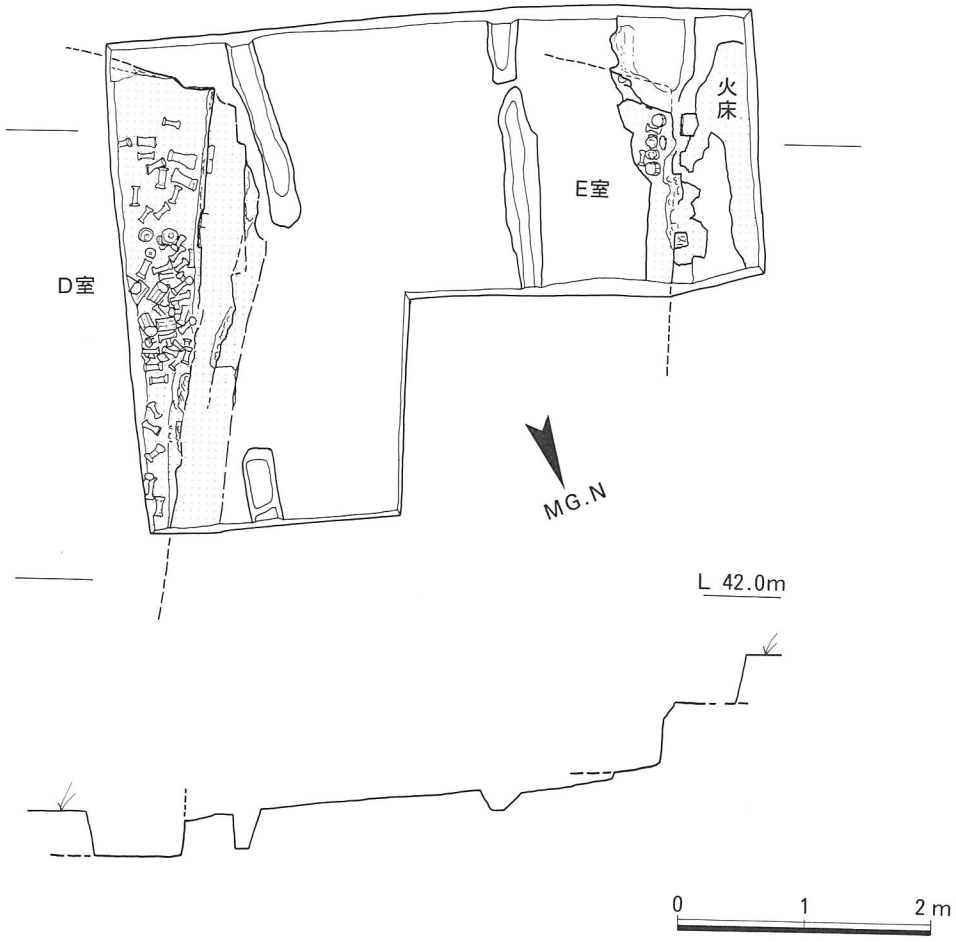


Fig.7 Cトレンチ遺構実測図($\frac{1}{60}$)

この窯跡は、比較的緩やかな丘陵の中央部に丘陵の主軸方向に沿うように築かれており、その主軸はE－67° Wでほぼ直線状に南東から北西に向かっている。なお、今回の調査では、調査区等の制約から覆屋の柱穴や排水溝等の付属する施設は検出できなかった。

窯室の規模をJ室とO室の床面積でみるとJ室が約19.6㎡、O室が26.4㎡であり上位に移るに従い窯室法量が増していることがわかる。

J・O室の平面形を図上で復元してみると火床側に最大幅があり、窯室長（奥行）と窯室幅の比はJ室で１：1.6、O室で１：1.4で、主軸方向に対して直交する方向に長い長方形の平面形をしていることがわかる。壁面は、D・E室はすべて塗り壁によりつくられているが、I・N・O室の奥壁側のみ20cm×12cm×10cmほどのトンバイを使用していた。J室では旧い奥壁の一部にトンバイを使用していたが、新しい奥壁にはトンバイの使用は認められなかった。D

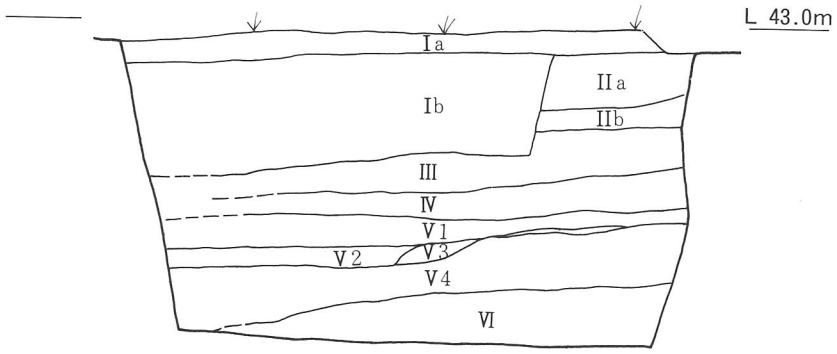


Fig.8 B2トレンチ西壁土層図($\frac{1}{40}$)

Ⅰa耕作土層
Ⅰb攪乱層
Ⅱa明黄赤色土層(焼土・陶片を含む)
Ⅱb明黄赤色土層(　〃　　Ⅱa層より硬く締っている)
Ⅲ 赤褐色土層(焼土陶片を含む)Ⅴ3明赤色焼土層(〃)
Ⅳ 明赤褐色土層(　〃　)Ⅴ4明赤色土層(〃)
Ⅴ1明赤色土層(　〃　)Ⅵ 赤灰色土層(Ⅱ～Ⅴ層に比較して含まれる陶片が少ない)
Ⅴ2赤灰色粘質土ブロック(〃)

・J・N室の奥壁は、二～三重になっており2～3回の改修があったと考えられる。砂床は、J・O室でみる限りほぼ水平なつくりであったと考えられる。

各窯室間での砂床の比高差はD・E室間で55cm、I・J室間で65cm、N・O室間で72cmである。

火床は、J室とF室で痕跡を検出したにすぎない。下層窯K′室の火床幅は、3.35mで火床境は高さ6cmほどであった。横焚き口は検出できなかった。物原の範囲はB2トレンチで検出した物原堆積層から窯主軸に向って左側一帯と推定される。

SX01は、O室の奥壁部で砂床下面から検出した幅65cm深さ12cmの溝状の遺構である。中には窯壁片と砂が充塡されていた。この砂中より11の京焼風呉須絵の皿が出土した。

5．遺　物

出土した遺物には陶器と窯道具がある。陶器の器種には茶入・香炉・皿・碗・壷・蓋・片口深鉢・徳利・擂鉢・花立・甕等がある。窯道具にはハマ・トチン・焼台・ナンキン・トンバイがある。

茶入（1～6）

出土した茶入はすべて肩衝茶入で器高11～12cmほどの大振りのもの2・3・4と器高8cmほどのもの1・4・5があり、ともに肩部に小さな耳をもつものがある。1は、B2トレンチⅡ層から出土した鉄釉の肩衝茶入である。外面色調は茶褐色で釉調は良好で焼成もよい。肩部には胎土中の鉄分が点々と黒色に発色している。内面には幅2㎜の成形時のロクロ目痕が顕著に残る。胎土は灰褐色で微砂粒を含むが比較的精緻で良好である。2は、B2トレンチⅡ層から出土したものである。胎土は鉄分の多い精緻な粘土を使用しており灰黒色である。胴部外面の釉調は良好で光沢のある茶褐色に発色している。底部は糸切り底である。3は、E室砂床から出土した器高12.1cmの耳付の肩衝茶入である。内外面とも施釉しており底部は施釉後掻き落としている。色調は明褐色で焼成も良好である。底部は糸切り底である。4～6は、いずれもB2トレンチⅡ層から出土した肩衝茶入である。4・5は肩から強くしぼり込んで短かい頸部とし口唇部は僅かに外反させて丸くおさめている。内外面とも釉調は良好で焼成もよい。5・6には

肩部に高さ１cmほどの山形の耳が付く。

香炉（10、16～18）

香炉には水漉した精良な胎土を使用する一群（京焼風陶器）と黒色で粗目の胎土を使用した一群とがある。10は、Ｂ２トレンチⅢ層から出土した呉須絵の香炉である。色調は、環元焼成により淡灰緑色である。内面は口唇部直下まで施釉し外面は高台脇近くまで施釉している。胎土は灰白色で精緻、焼成は良好で半磁器化している。16は、Ｂ２トレンチⅥ層から出土した器高6.9cmの銹釉の香炉である。内面は口唇部直下、外面は胴部に施釉している。色調は茶褐色である。高台から胴部屈曲部までは左回転のロクロによるヘラケズリで成形している。内面には幅５㎜ほどのロクロ目が残る。17は、Ａトレンチ出土、器高7.7cmの型押し成形銹釉六角香炉である。外面の上端には幅５㎜の唐草文帯を配し、それ以下は型押により表出させた七宝繋文と一対の獣面が付く。内面は型押しの為の指跡が多数残っている。外面の口縁部直下から底部脇まで施釉しているが、焼成温度の不足から釉調、発色ともに不良で黄褐色をしている。18は、I室の砂床から出土した器高８cmの土灰釉（青唐津）香炉である。胴部は三段にしぼっている。内面には飴釉の小碗の一部が熔着し、見込には目砂が円形に付着している。胎土は黒色で目は細い。

皿（９、11、32）

皿には、水漉した白土を使用し、呉須や印を施した一群と、鉄分の多い精良な土を使用し白化粧土を刷毛塗りにした一群とがある。

９の、高台は低くの断面を方形に鋭く削って整形し、高台内はほぼ平坦につくる。見込には同一個体が熔着しているが外面は高台脇から５㎜ほどのところまで施釉し、それ以下は露胎である。釉調は良好で灰黄色。胎土は灰白色で極めて良好。中央には、径2.2cmの円圏を浅くつくりその中に「京．京」の押印がある。11は、SX01の埋土内から出土した呉須による山水文を描いた小皿である。胎土は黄白色で精緻である。色調は淡黄灰色で外面は高台近くまで施釉している。内外面とも釉調は良好で微細な貫入がはいる。見込には若干のふりものがある。32は、復元口径20.3cmの白化粧刷毛目皿である。色調は淡灰褐色を基調としその上に白化粧土を横刷毛塗りとし見込には更に波形に刷毛塗りしている。

碗（12～15、26～31）

碗には、水漉した黄色の細かな粘土を使用し、高台の内面に兜巾を残し畳付以外はすべて施釉するもので御器手茶碗写しとされる一群、鉄分の多い細かな粘土を使用し、白化粧土で刷毛目を施すもので高台の内面に兜巾を残し、畳付以外に施釉する一群、粗目の土を使用し高台は露胎で飴釉を施す一群がある。

12は、器高7.2cmの御器手茶碗である。高台内には僅かに兜巾が残り、高台断面は、外にやや広がった台形状である。高台脇は鋭く削って成形しその後施釉している。色調は暗黄灰色で釉調、焼成ともに良好。13は、口径10.2cm、色調は灰緑色、胎土は精良で焼成も良い。14・15

は鉄分の多い粗い土を使用した飴釉の碗で、高台は露胎で高台内には兜巾を残す。色調は黒褐色である。14は、器高5.1cm、15は、6.8cmであり、B２トレンチⅡ層及びⅥ層出土である。26～31は、高台内に兜巾を残し畳付き以外はすべて施釉し、白化粧土で刷毛目を描くものである。

壷（20～22）

壷には、飴釉を施した広口の短頸壷があり、器高により大小の二群があり大きい一群には口径の大小がある。

20は、I室砂床出土で器高10.5cm、21は、B２トレンチⅡ層出土で口径8.9cm、22は底径6.5cmでともに口縁部内面から胴部上半に飴釉を施し、下半から底部はケズリ成形である。３点ともに胎土は粗く露胎部分は赤褐色から黒褐色で、焼成も良好である。

蓋（23～25）

蓋には、径により大中小がある。すべて飴釉を上面のみに施し、裏面には糸切り痕を残す。

23は、I室砂床出土で径6.8cmで中央に高さ１cmほどのつまみをつくり、上面のみ飴釉を施す。

片口（34）

34は、I室砂床出土で復元口径12.4cm。飴釉を施す嘴状の片口である。

深鉢（35）

35は、Aトレンチ表土採集の刷毛目を施す深鉢で、復元口径18.8cmで口唇部は無釉である。

徳利（36）

36は、B２トレンチI層出土の徳利で、口唇部でわずかに外反させている。頸部から肩部にかけて青灰色に発色する。

擂鉢（35、41）

35は、７条を単位とした条痕で内外とも鉄漿を施し褐色である。外面に寛永通宝を押印している。内面は使用により磨滅している。条痕の一部に緑銹が認められる。

花生（38、39）

38～39はともに飴釉を施す花生である。39は、底にトチンが熔着している。

甕（40～42）

すべて鉄漿を施し内面に格子叩目をもつ。外面肩部、胴部には２～３条の沈線や貼文をもつ。

窯道具（44～42）

44は、三足付のハマ。48は、糸切りのハマ。60～62は、断面楔形のハマ。57～59は、胴部が中空になったロクロ造りのトチン。70は、面取りを施したトチンである。

小結

当窯跡は丘陵主軸に沿って東から西に向かって登る階段状連房式登窯跡で、窯室は推定15室、水平全長60mで上位に移るに従い窯室の法量が若干増す形態の窯であること。物原は窯体に向かって左側に位置すること。新旧の窯体の重なりがあること。上層の窯は二回から三回の改修をしていること。操業時期は出土した遺物や窯体の構造から17世紀の第三・四半世紀頃と考えられる。

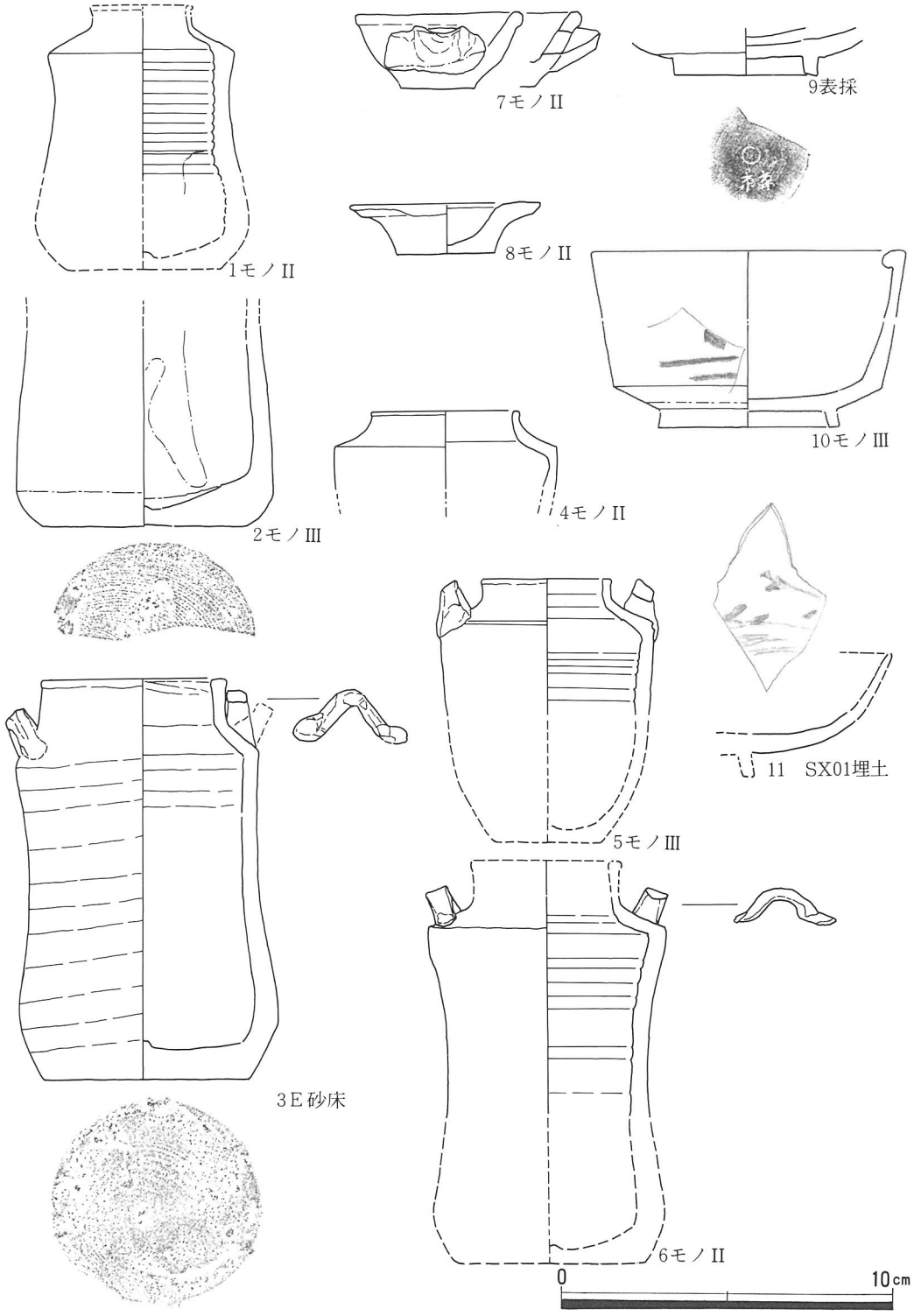


Fig.9 出土遺物実測図・茶入・香炉・皿(1/2)

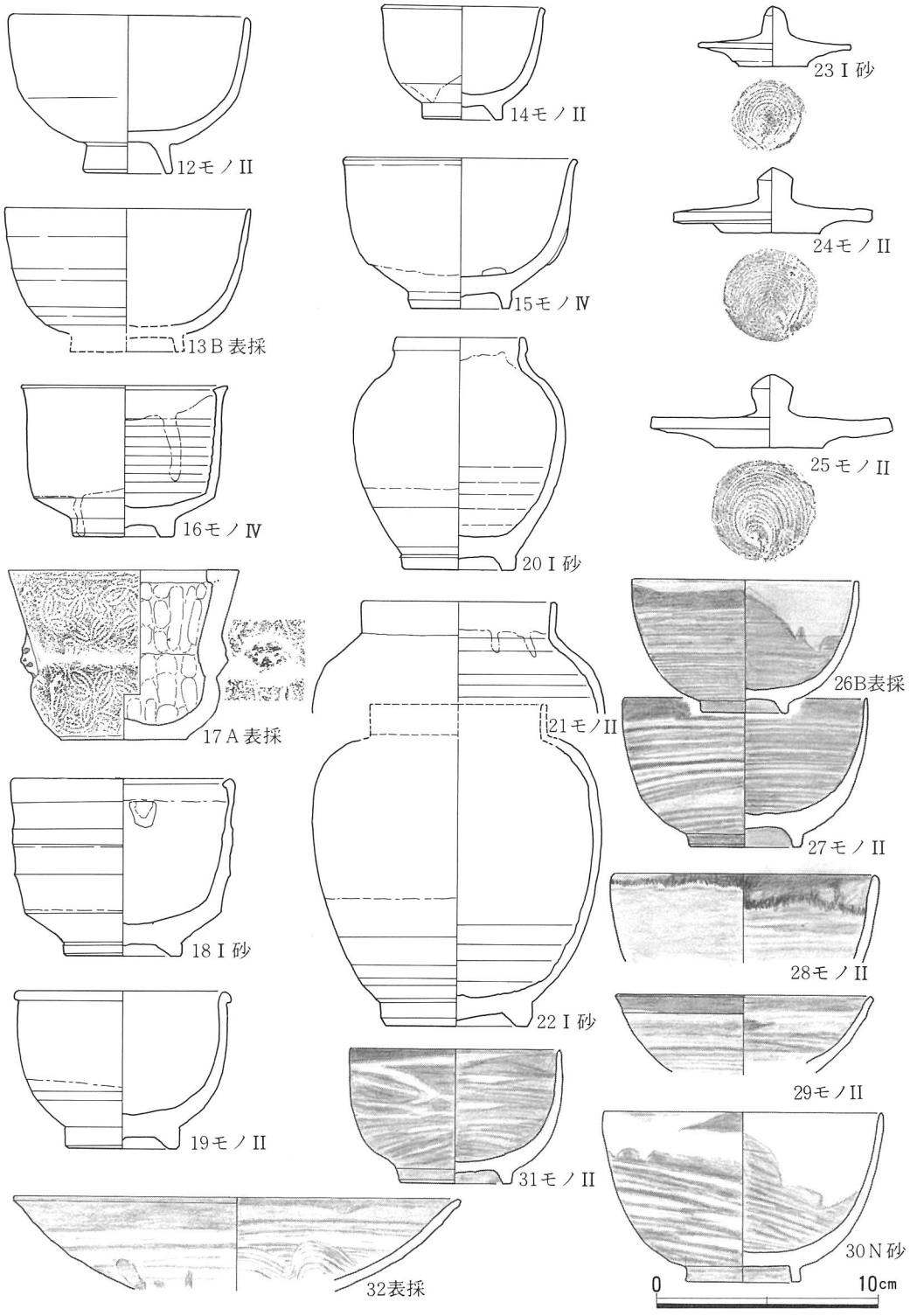


Fig.10 出土遺物実測図・碗・香炉・壺・蓋・皿($\frac{1}{3}$)

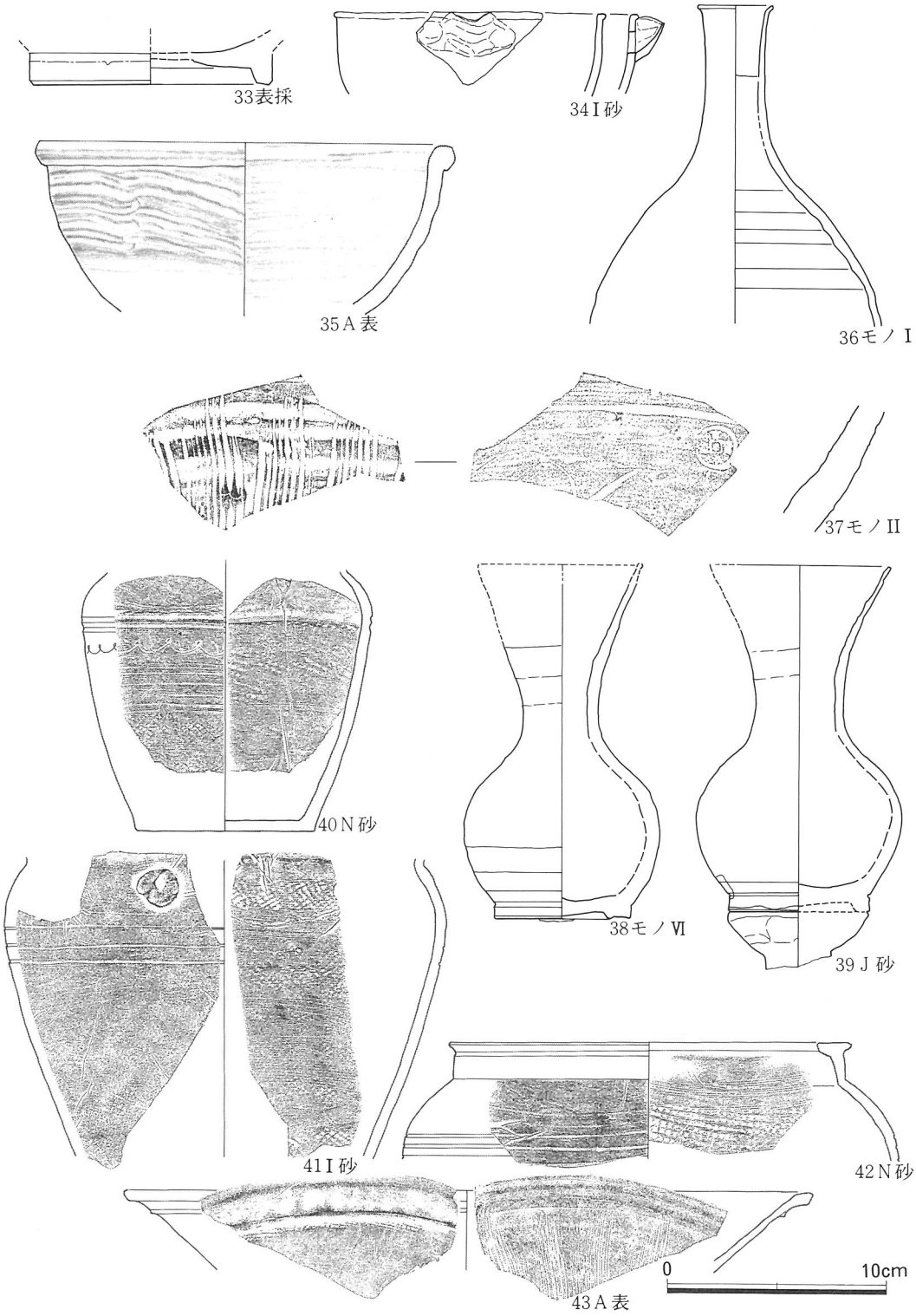


Fig.11 出土遺物実測図・皿・片口・鉢・徳利・擂鉢・花立・甕・壺($\frac{1}{6}$・$\frac{1}{3}$)

※40～43は$\frac{1}{6}$他は$\frac{1}{3}$

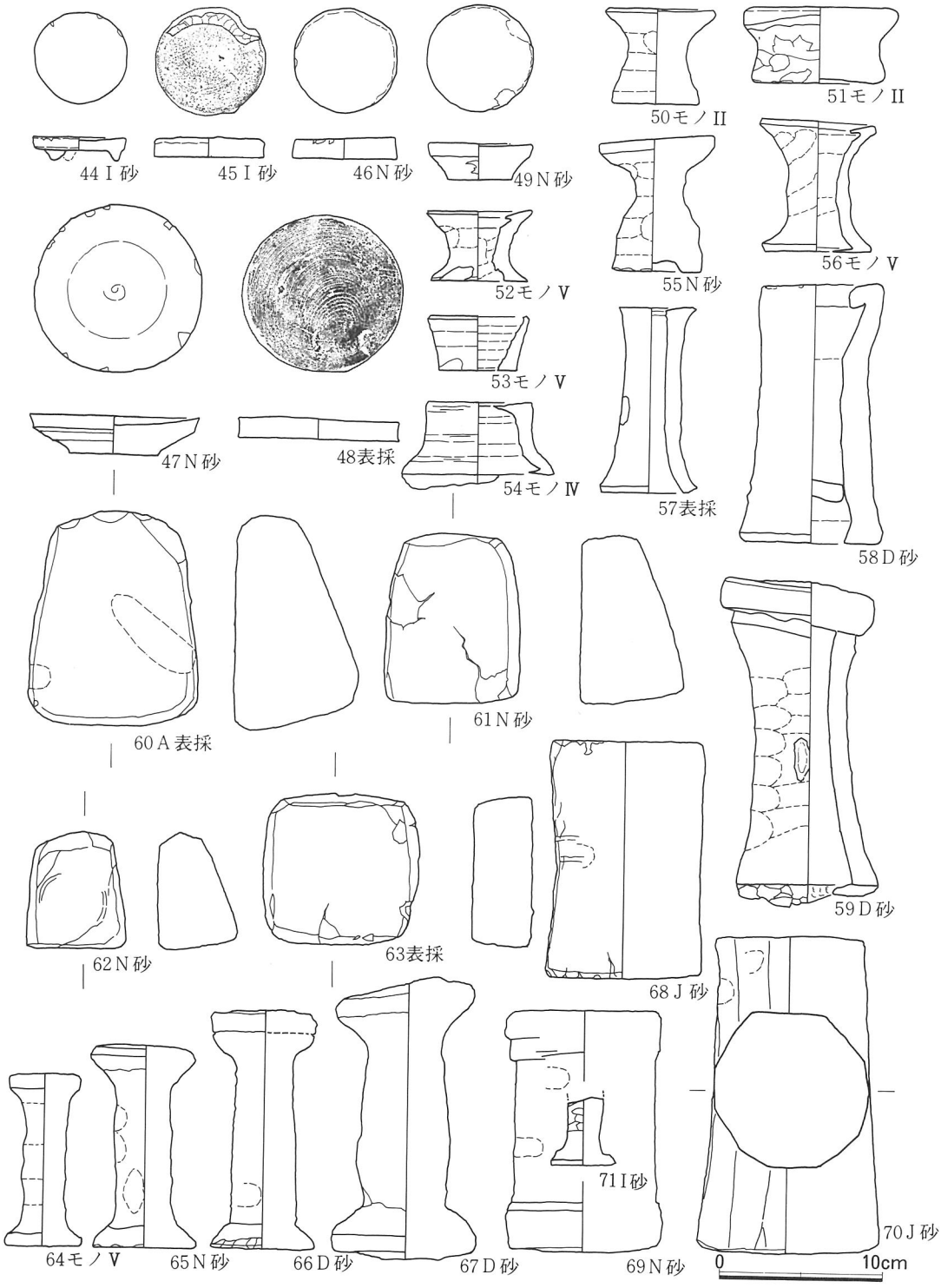
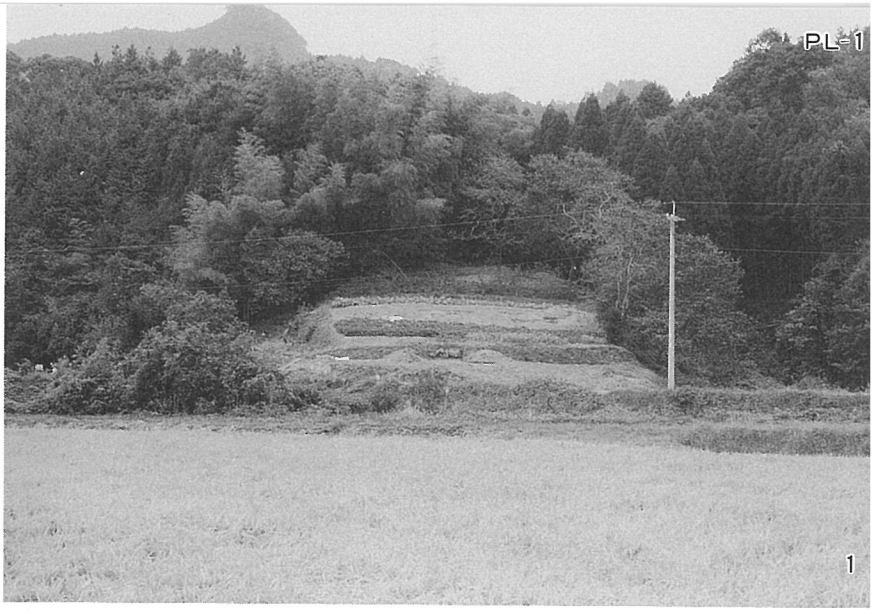
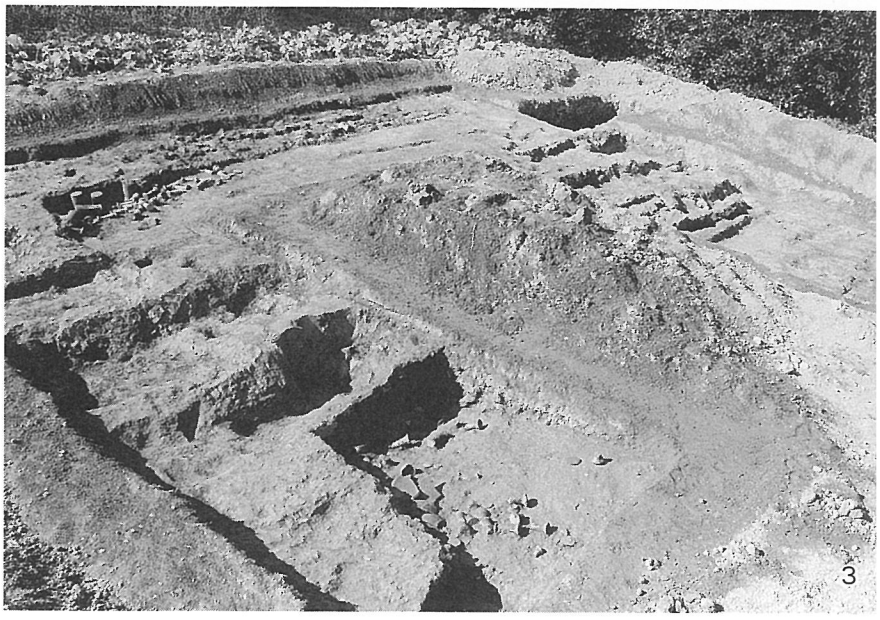


Fig.12 出土遺物実測図・窯道具(ハマ・トチン・焼台)($\frac{1}{4}$)
44～49・60～63ハマ 51焼台 50・52～55ナンキン 56～59・64～71トチン



1 金石原窯辻窯跡全景
（東から）

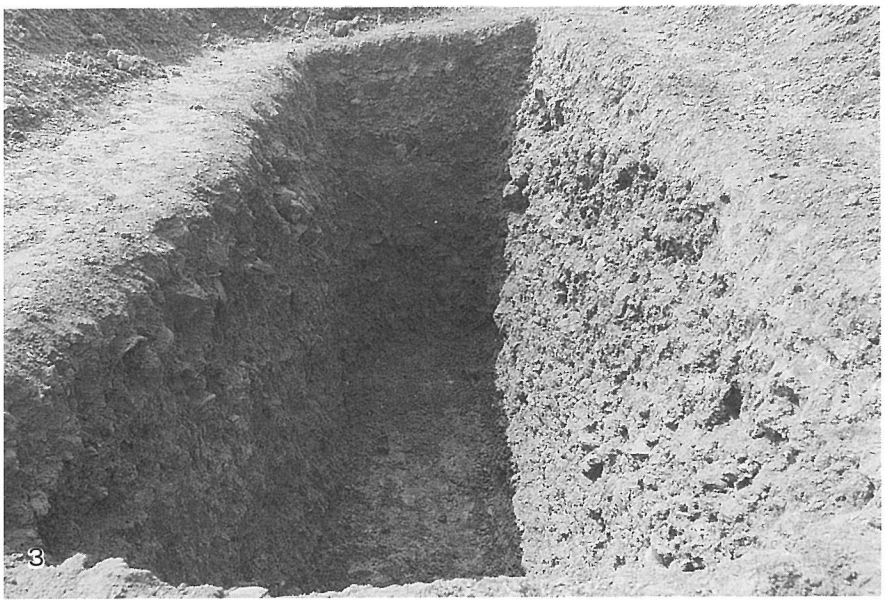
2 Aトレンチ全景（東から）



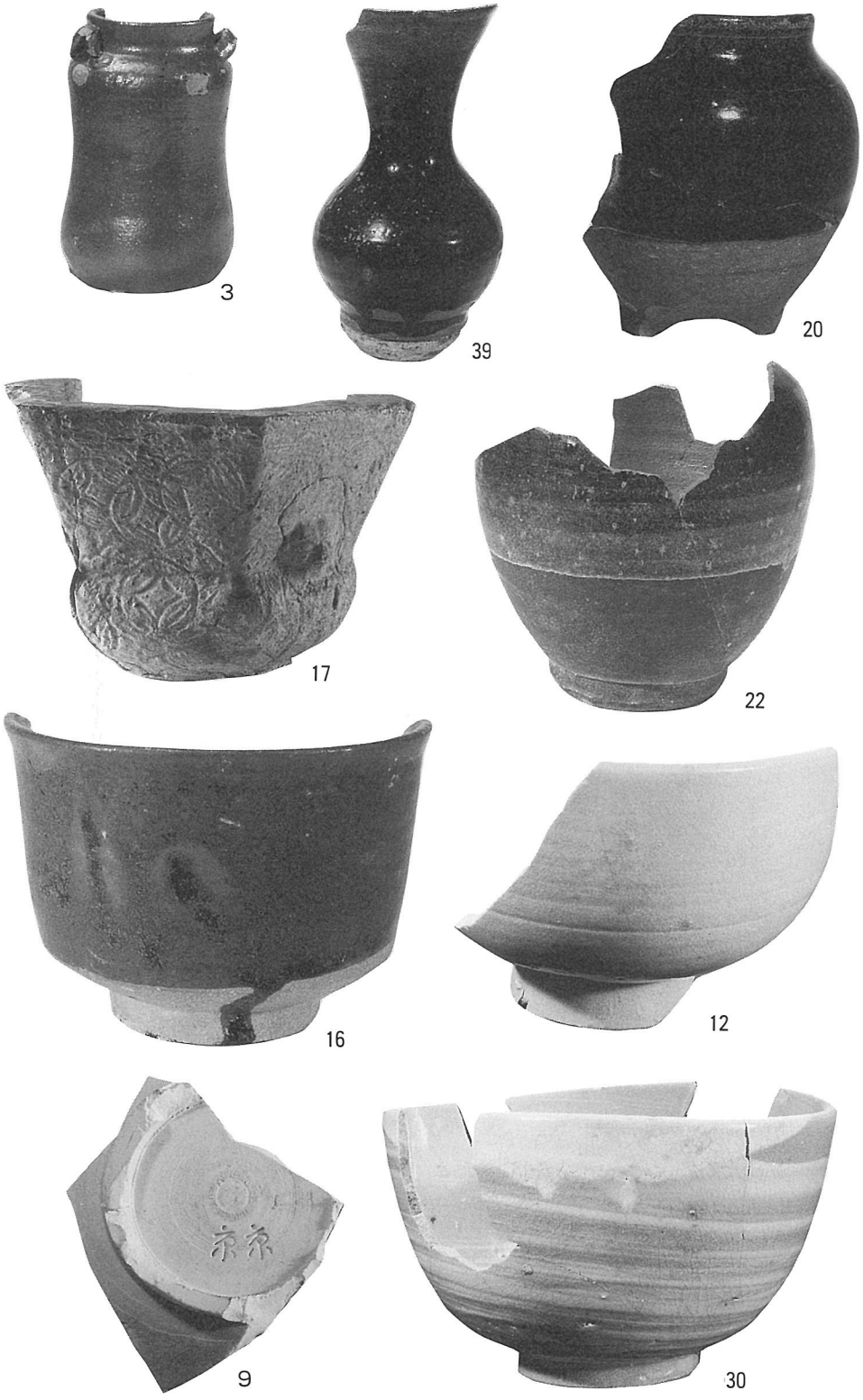
3 Bトレンチ全景
（南東から）

1 Bトレンチ南半部状況
（南東から）

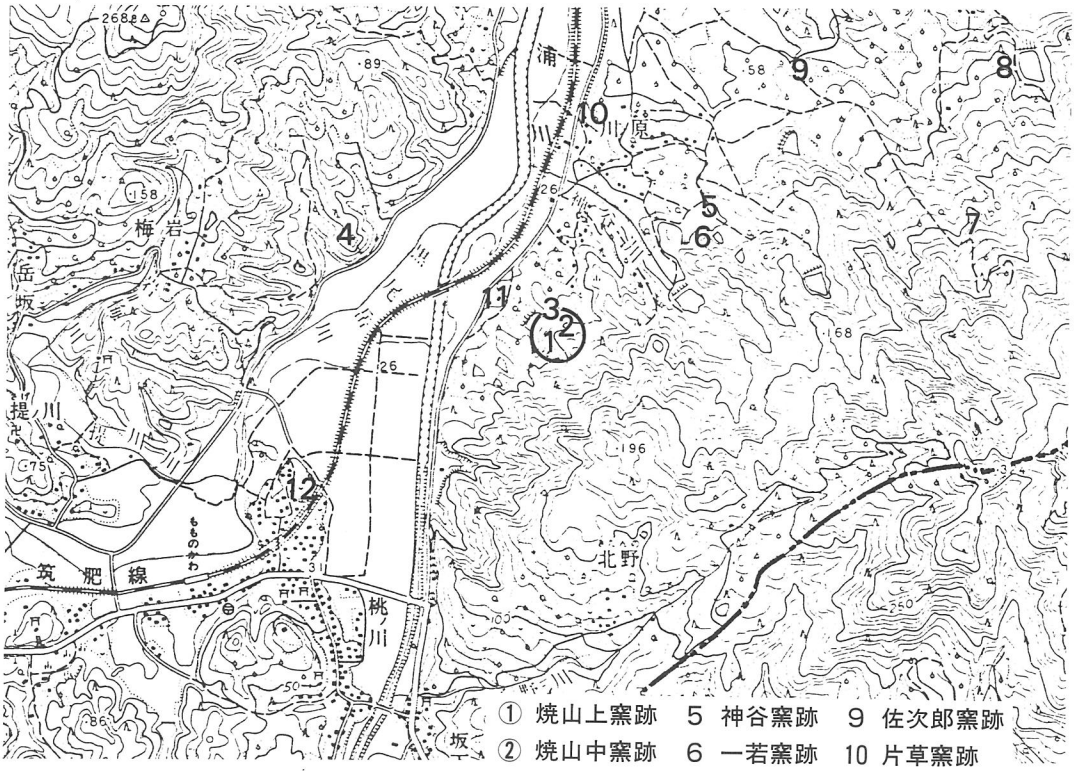
2 Cトレンチ全景（東から）



3 B2トレンチ物原堆積状況
（北から）



金石原窯辻窯跡出土遺物　数字は実測図の通し番号に対応する（縮尺不統一）



Fig．1 周辺窯跡分布図($\frac{1}{25,000}$)

III．焼山上窯跡の調査

1．遺跡の立地と環境

焼山上窯跡(やきやまかみかまあと)は、伊万里市大川町川原字辻5478番地ほかに所在している。大川町は、伊万里市域の東端に位置する地域で旧唐津藩領に含まれ、桃山時代末期から江戸後期にかけての窯跡が多数[註1]所在するところである。町域の東辺には標高763mの八幡岳を主峰とする山並が連なり相知町・多久市との境をなし、南辺には標高518mの眉山が位置し武雄市と隔てている。西辺域には町域を区画するように松浦川が北流している。この松浦川に向かって眉山の北方域では小河川が小さな谷を刻み、標高50mから100mほどの小舌状丘陵地形が発達している。

当窯跡の所在する川原地区は、松浦川に面した標高20mから40mの丘陵の先端域に立地している。この地区には、桃山時代末期から江戸時代末期にわたる古唐津系の窯跡が多数所在しており、これらの窯跡の中には、文禄3年(1594)の波多氏滅亡により離散した陶工により開窯されたものがあると言われており、肥前陶磁の伝播や系譜を考えるうえで重要な地域となっている。

窯跡は集落の南方に位置する眉山山塊のひとつである。標高194mの八天さんから北西に向かって伸びる丘陵の先端部に、丘陵の主軸方向に沿って位置している。

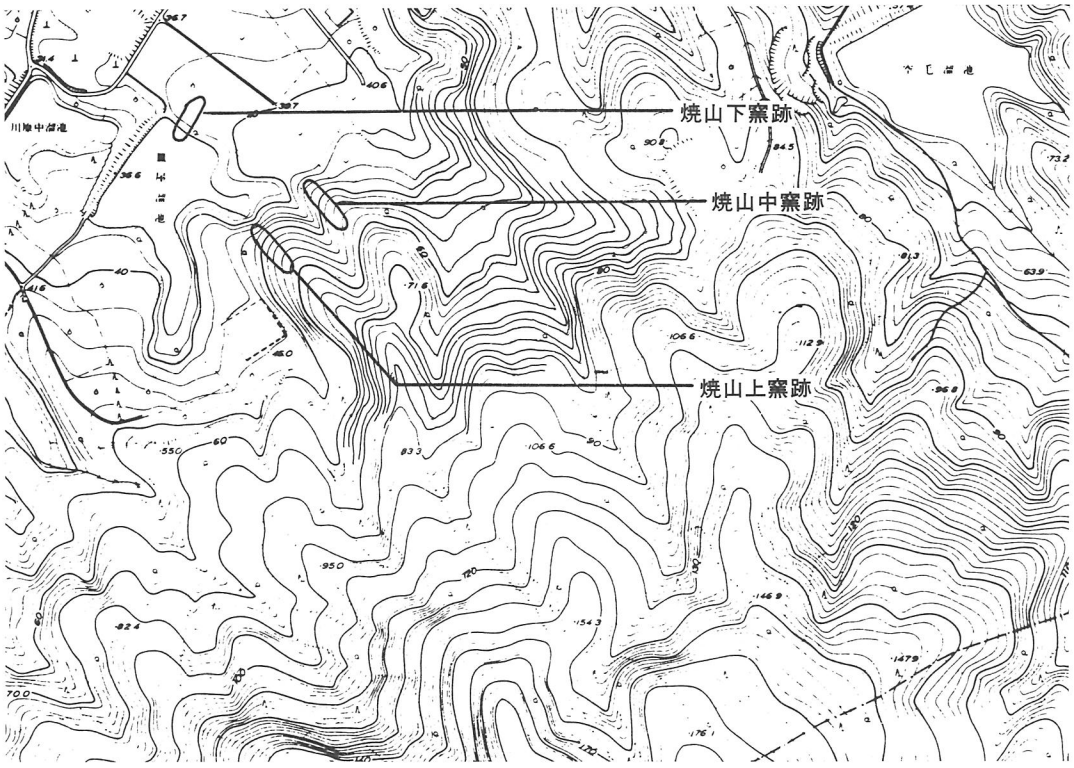


Fig.2 焼山上・中窯跡周辺地形図($\frac{1}{5,000}$)

この窯跡の位置する川原地区の周辺には、16世紀末から17世紀前半に含まれる時期の窯跡として梅坂窯跡[註2]・神谷窯跡[註3]・一若窯跡[註4]・道園窯跡[註5]・焼山下窯跡[註6]・焼山中窯跡[註7]がある。これらの窯跡は、一般に慶長年間（1596～1614）から元和年間（1615～1623）にかけて操業した窯だといわれているがそれを裏付ける明確な文献資料などはない。このほか享保年中（1716～1735）に操業したといわれている善徳窯[註8]・佐次郎窯・片草窯などの陶器窯跡がある。

註1．大川町内では16箇所の窯跡が確認されている『古窯跡分布調査報告書』伊万里市教育委員会1984

註2．丘陵の主軸と同一方向に、北から南に向って登る窯で現在幅1.9m、奥行2.3mの主軸方向に長い窯室が5室残っている。この窯では『神谷窯跡』で多量に出土した、甕類と類似するものを焼造しており、焼山上窯跡出土品（45～52）の甕類はよく類似する資料である。『古窯跡分布調査報告書』伊万里市教育委員会1984

註3．昭和61年10月に伊万里市教育委員会により発掘調査されている。幅1.86～2.31m、奥行2.02～1.80mの縦に長い窯室が6室確認されている。『神谷窯跡』伊万里市教育委員会1987

註4．神谷窯跡南側の丘陵に位置する。神谷窯跡出土の甕、壷と類似する資料が出土する。

註5．この窯跡からは焼山上窯跡出土の擂鉢と同形態の擂鉢が出土している。現在幅2m奥行2.5mほどの窯室が8室ほど確認できる。『古窯跡分布調査報告書』伊万里市教育委員会1984

註6～8．『古窯跡分布調報告書』伊万里市教育委員会1984

2．遺跡の概要

焼山上窯跡は、これまで焼山地区にある他の窯跡と区別されることなく総称して焼山窯跡として報告されている例が多く、それも一部の焼造品によるもので松浦唐津の中では著名であり

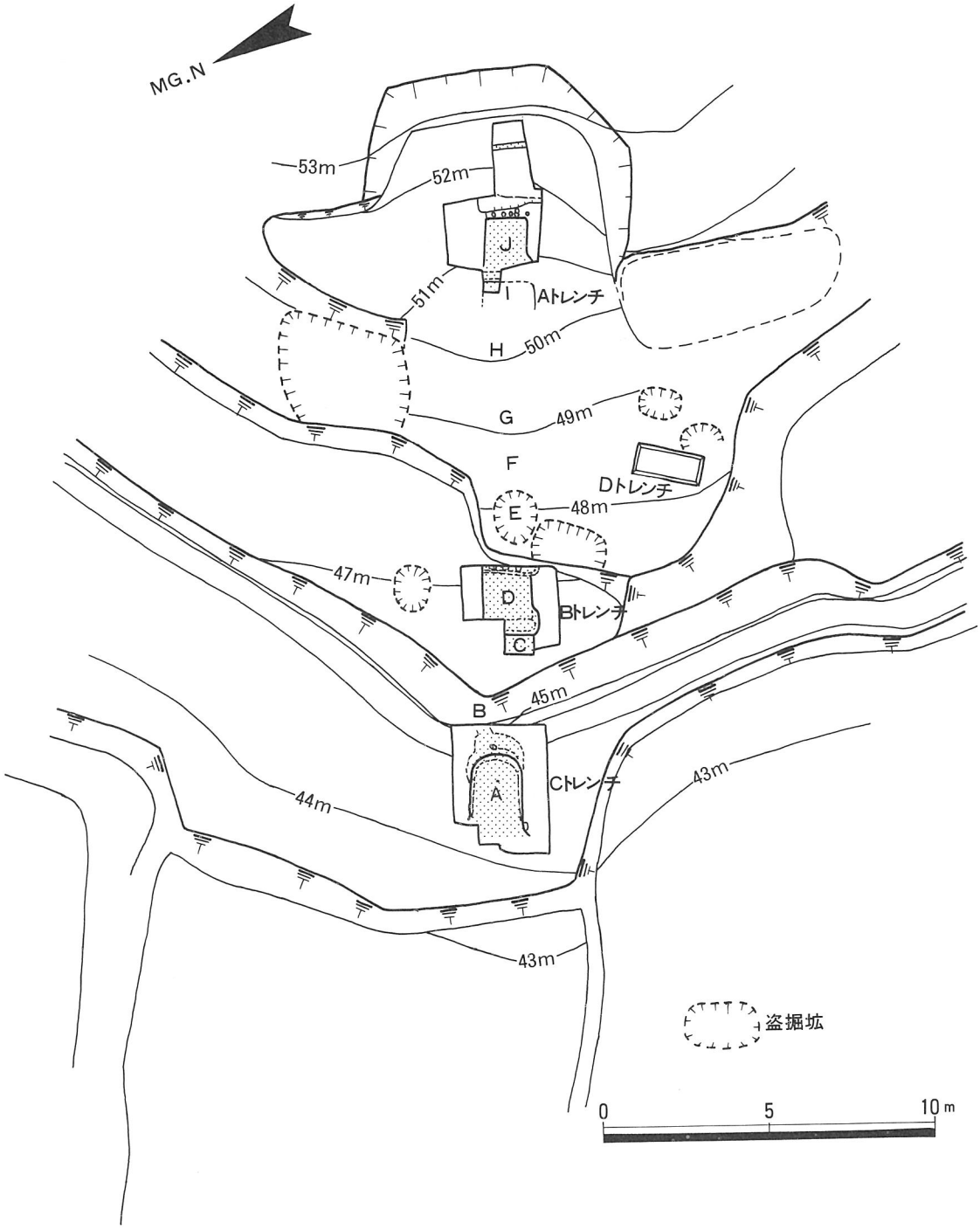


Fig.3 焼山上窯跡地形図(1/200)

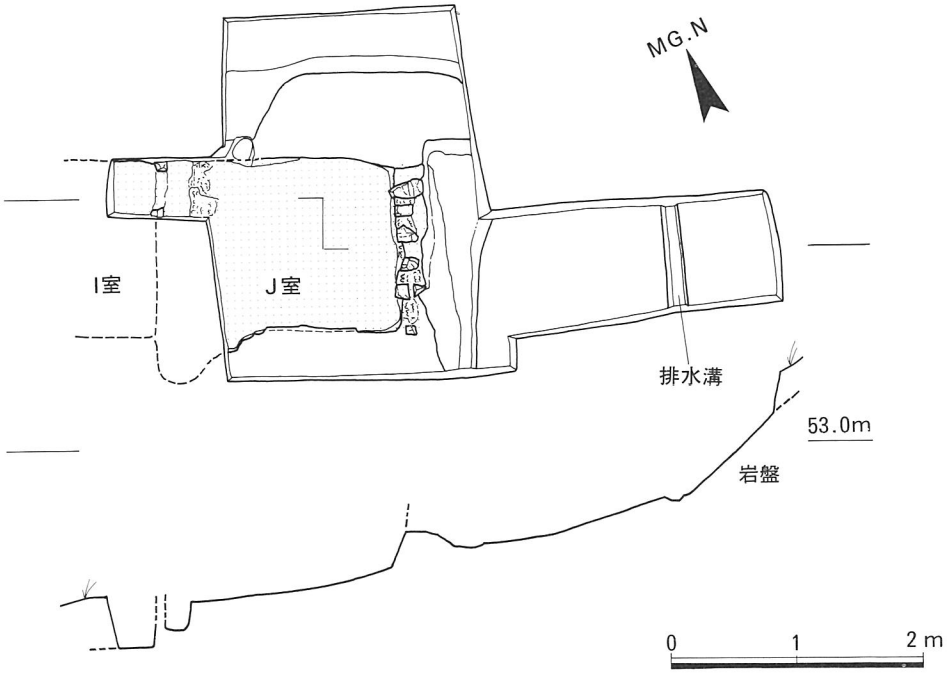


Fig.4 Aトレンチ遺構実測図(1/60)

ながら、一部の焼造品しか知られておらず、窯体の構造や規模に関しては市内の諸窯と同様に不明であった。

窯跡は南東から北西に向かって伸びる小丘陵の先端・標高43mから54mにかけて位置し、北東側と南西側は北西に向かって伸びる小さな谷で隔てられている。窯体の下位の一部には山道が等高線に沿って東西方向に横切っている。窯体の上、中位の東半部には開墾による三段の段落があり、西半部には多数の盗掘坑が散在しているが、地表面にはほとんど遺物は認められなかった。

3．調査の概要

調査は窯体の構造・規模・焼造品の内容を把握する為に任意にトレンチを設定して実施した。

窯跡の最上位に築窯に伴なう高さ2mのU字形の地山削平面を確認したので、その中央を窯体主軸と推定し、上位の窯体を検出する為、2×3mのAトレンチを設定した。その結果J室の奥壁・砂床を検出したので、次に排水溝の存在を確認する為上位に拡張し、排水溝の一部を検出した。その後、中位の窯体の確認の為、1.5×3mのBトレンチを設定した。その結果D室の奥壁とC室の奥壁の一部を確認し、中位下半の窯室規模と窯体の方向が明確になったので、下位の窯室を確認する為に、3×3mのCトレンチを設定した。その結果A室を検出した。物原層を確認する為、Dトレンチを設定したがほとんど遺物は出土しなかった。

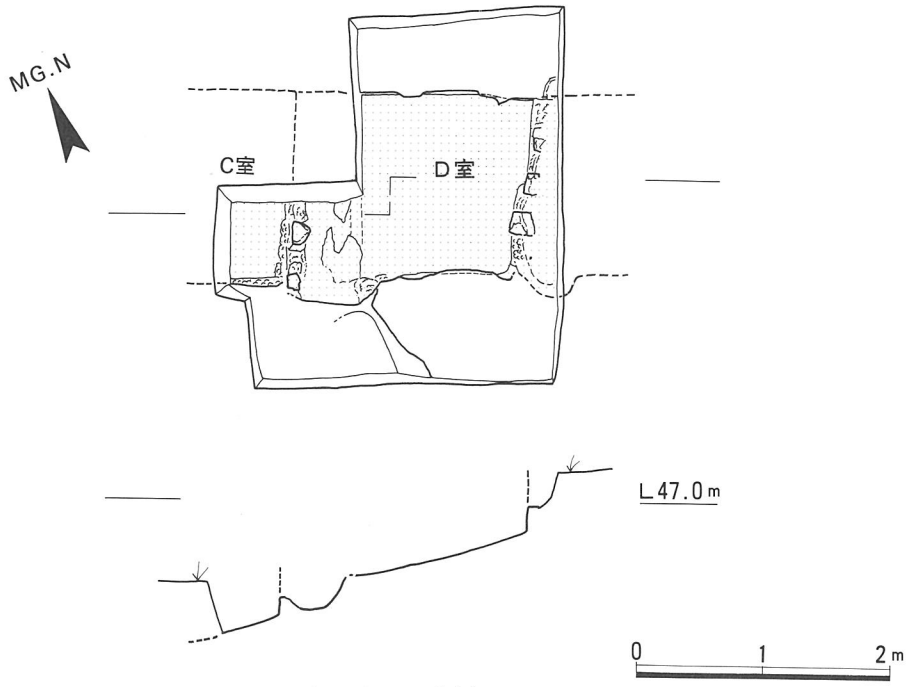


Fig.5 Bトレンチ遺構実測図($\frac{1}{60}$)

4．遺構の概要

当窯跡は、雑木林に立地している。盗掘坑が多いが窯体の残存状況は比較的良好であった。

検出された遺構には、階段状登窯の推定窯室10室の範囲のうち５室分があり、下位の窯室からA・C・D・I・J室の呼称を付した。

各窯室では、窯壁、砂床、火床及び分焔柱を確認した。A室の奥壁面下端からJ室奥壁面下端までの水平矩離は16.25m、窯体の傾斜角はC・D室間で20°I・J室間で19°である。

この窯跡の主軸はE－22°－Sで直線に北西から南東に向かっている。今回の調査では窯体のほか排水溝を検出したが、覆屋の柱穴や通路は検出できなかった。

窯室の規模をD室とJ室の床面積でみるとD室が約2.25㎡、J室が2.43㎡であり、中位から上位にかけてほとんど同似法量の窯室であることがわかる。D・J室の奥行と幅の比は１：0.8～１：0.76で主軸方向に長い方形の平面形をしていることがわかる。壁面はすべて塗り壁で造られ、砂床は火前から奥壁に向かって傾斜角９°～15°で造られており、上位の窯室の砂床傾斜は中位の砂床傾斜に比較して緩やかである。火床はD・J室で検出され奥行約20cm、深さは約27cmで火床境はない。D室で横焚きと出入兼用口を検出した。物原範囲は地形や焼造品の散布状況から窯体の右側一帯と推定される。A室は平面が逆U字形をしており幅1.6m、奥行2.7mで奥壁残存高は約60cmで中央部には分焔柱に使用した10×25cmの縦長の小割石が１個あり、右側壁の前面には40×20cmほどの石を縁石としていた。奥壁、側壁とも地山面を掘削して

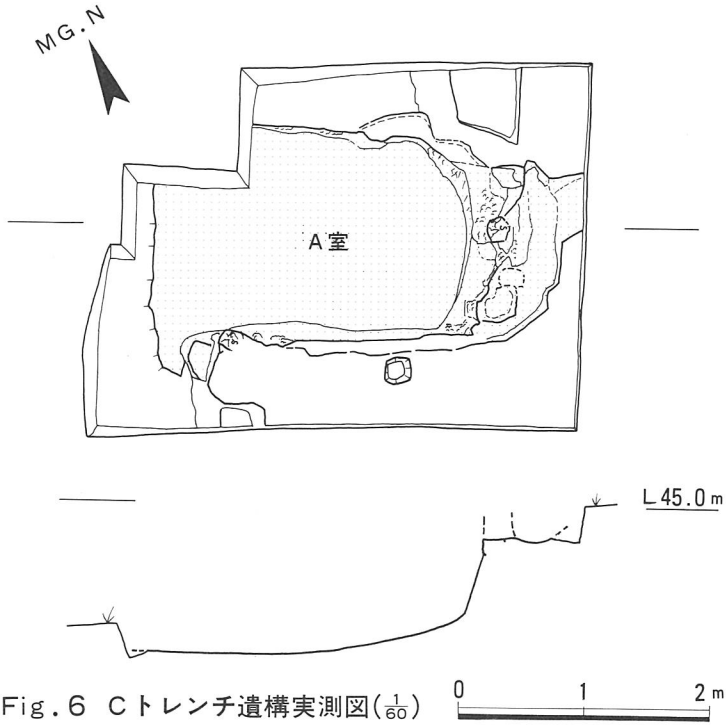


Fig.6 Cトレンチ遺構実測図(1/60)

築いており、壁面には掘削時の工具の使用痕跡が認められた。壁面は全体に灰黒色で、火前側に火床がないことや次の窯室床面との比高差も大きく、平面形か卵形であること下位に窯室が存在しないことから胴木間と推定した。C室は奥壁の右隅部と通焔孔2箇所、分焔柱1箇所を検出した。奥壁残存高は約20cmで、通焔孔の幅は15cmであった。D室は幅1.48m、奥行1.70mで左右側壁と奥壁、砂床、火床を検出した。左右側壁の残存高は20～30cmである。奥壁残存高は約30cmで、割石を使用した3個の分焔柱と4箇所の通焔孔の下半部を確認した。中央の分焔柱は35×18×10cmの角柱状で、通焔孔は幅15～20cmである。火床は断面U字形で深さ28cm。右焚口部が側壁より20cmほど外にでている。C室奥壁下端とD室奥壁下端との比高差は66cm、床面には粗い砂層が1～2cmあったが均一でわなく中央部で厚い。J室は幅1.8m、奥行1.35m、左右側壁、奥壁、砂床、火床の一部を検出した。左右側壁残存高は27.5～34cmで、奥壁残存高は30cm。幅10～20cmの煙道孔6箇所と10×10×30cmほどの角柱状の割石（砂岩、安山岩）を使用した煙道柱7箇所を検出した。砂床は火前から奥壁へ向かって高くなっており、火前（火床側）と奥壁下端との比高差は24cmである。

煙道長は20cmほどで、煙道上位の地山面は煙道部から1mほどのところまで熱を受けて赤変していた。J室の両側壁は地山面を掘りさげて構築しているが、奥壁部は小礫の混った粘土を使用しと床面を成形した後に造っており、奥壁体の基部の厚さは40cmほどである。

排水溝は、J室の奥壁の上位2mほどに位置し、岩盤を掘削して造られ、幅15cm、深さ5cmである。

5．遺物の概要

出土遺物には、陶器と窯道具がある。陶器の器種には、皿・碗・鉢・蓋・徳利・水指・擂鉢・壷・甕・片口・向付がある。窯道具にはトチン・ハマ・火覗き穴の蓋などがある。

陶器（Fig7～11）

出土した陶片はほとんど表採か撹乱層からの出土である。最も多いのは粗製の甕、壷類であり他のものは少ない。碗や絵唐津に土灰釉や長石分の多い釉があるほかはすべて飴釉である。

皿（1～9・11～15）には底部径13cmほどの大皿（4～8・11・12）と底部径5～6cmの小皿（1・9）がある。器形はすべて胴部上半が緩く屈曲して外反した段付きの形態のものである。すべて高台は露胎で高台脇はヘラケズリ痕が残る。8は底部径12.4cmの大皿で見込には樹木を描く、やや長石分の多い透明釉をかけていて色調は赤褐色、外面下半は露胎でヘラケズリ痕が残る。13・14は飴釉の皿で淡黄褐色である。

碗（16～22）16～18・20～22は土灰釉で淡黄緑色～淡黄緑色である。19は長石釉で灰白色、胴部全体にケズリ目を残す。22を除きすべて露胎である。

鉢（23・24）23・24は土灰釉の深鉢で黄縁色、36は三足付の浅鉢、底部にヘラケズリが残る。

蓋（25～31）25は鉄絵の蓋、28～31は外周を面取りし、上面に井桁文・同心円文・裏面に陽印をもつものがある。

徳利（32、33）はともに餔釉で内面にしぼり目が残る。32は肩部に二条の沈線が廻っている。

水指（38、39）38は胴部に波状の沈線を張らし、その上に鉄釉で草文を描く。39は把手をもち、内面には青海波状の叩目跡が残る。

擂鉢（40～42）42は底部径9.8cm、底部は碁筒底風である。底部から上位4cmまでヘラケズリ後施釉している。色調は白灰色で、内面の条痕は5条を1単位としている。

壷（45～48）鉄漿が飴釉を施す。45は内面に青海波状の叩目を残す。

甕（49～52）鉄漿が飴釉を施し、口縁部下に1～2条の突帯状の隆帯を廻らしている。52は復元口縁部径は31.8cmである。

片口（66）66は注ぎ口が嘴状になる片口で、口縁部は折返し飴釉が斑にかかり茶褐色。

四方向付（10）底部のつくりは低く、胴部下半には3条の凹線を廻らす。鉄絵の円文と唐草文を描く。釉は長石分の多い釉で灰白色である。

その他60は把手、61は壷の肩部、ヘラケズリによる連孤文。62は貼付文。64は壷の肩部で沈線間に波状の沈線を描く。65は壷の肩部につく紐かけの縦耳。67は把手付きの短頭壷。62は鉄漿、ほかは飴釉、68～70は甕胴部の突帯文。69は飴釉、ほかは鉄漿。71～77は甕底部。71～73は貝目。74～77は陽印、すべて飴釉。

窯道具（78～85）78は中央に穴を穿っている空気量調整用の蓋。79は火覗き穴の蓋。80～82はトチン。82は高さ8.5cm。80・82は上面に目砂と高台跡が残る。83～85はハマ。断面が床の傾斜に合うようクサビ形をしている。

小結―当窯跡は、丘陵の先端部標高44～53cmに位置し、丘陵主較に沿って北西から南東に登る階段状登窯で、推定水平全長18.8mで10室ほどの規模である。物原は窯主軸に向って右側にある。この窯の操業時期は、窯構造や出土資料から16世紀[註1]から17世紀初頭と考えられる。

註1．大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館1984

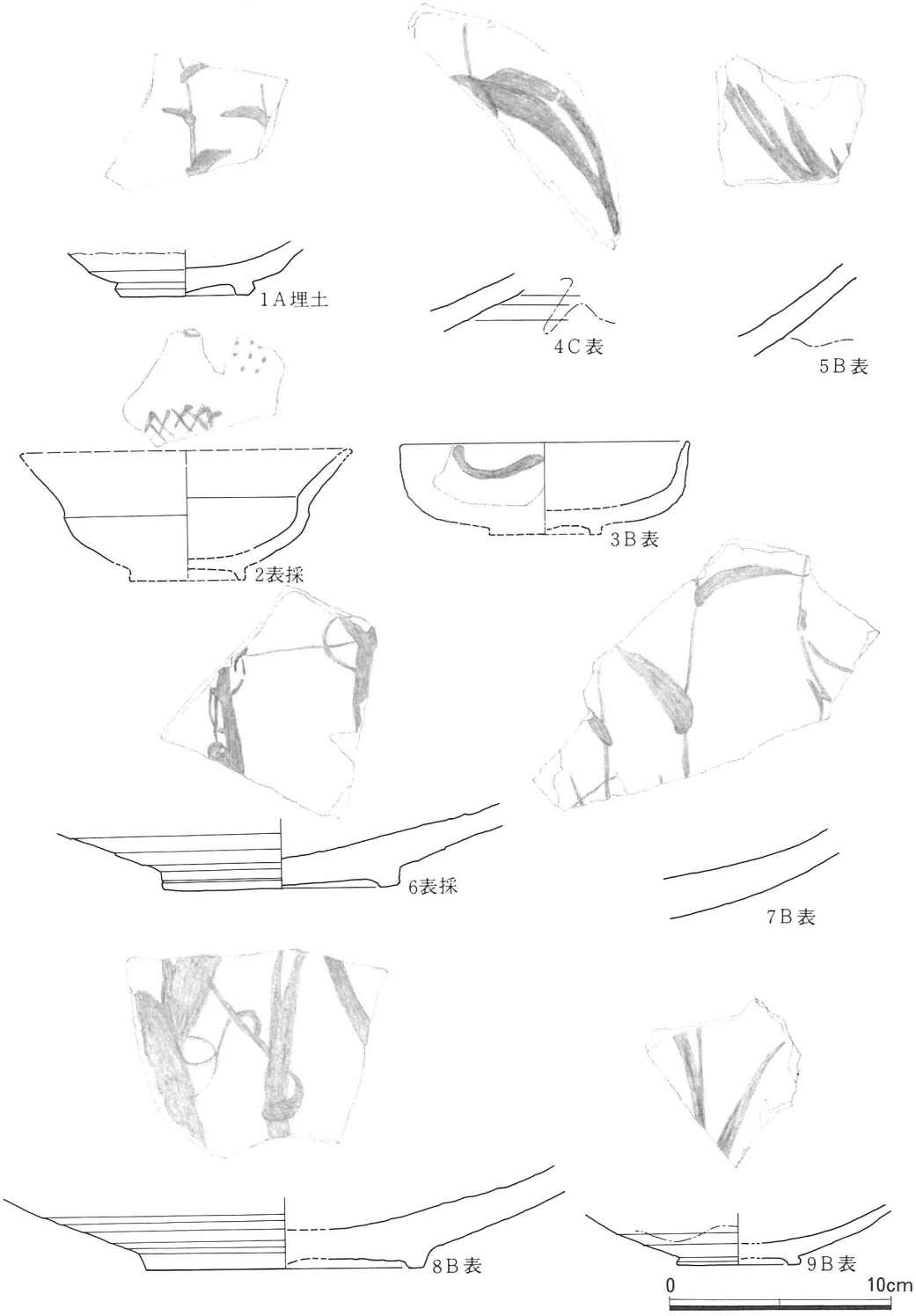


Fig.7 出土遺物実測図・鉄絵皿・鉢($\frac{1}{3}$)

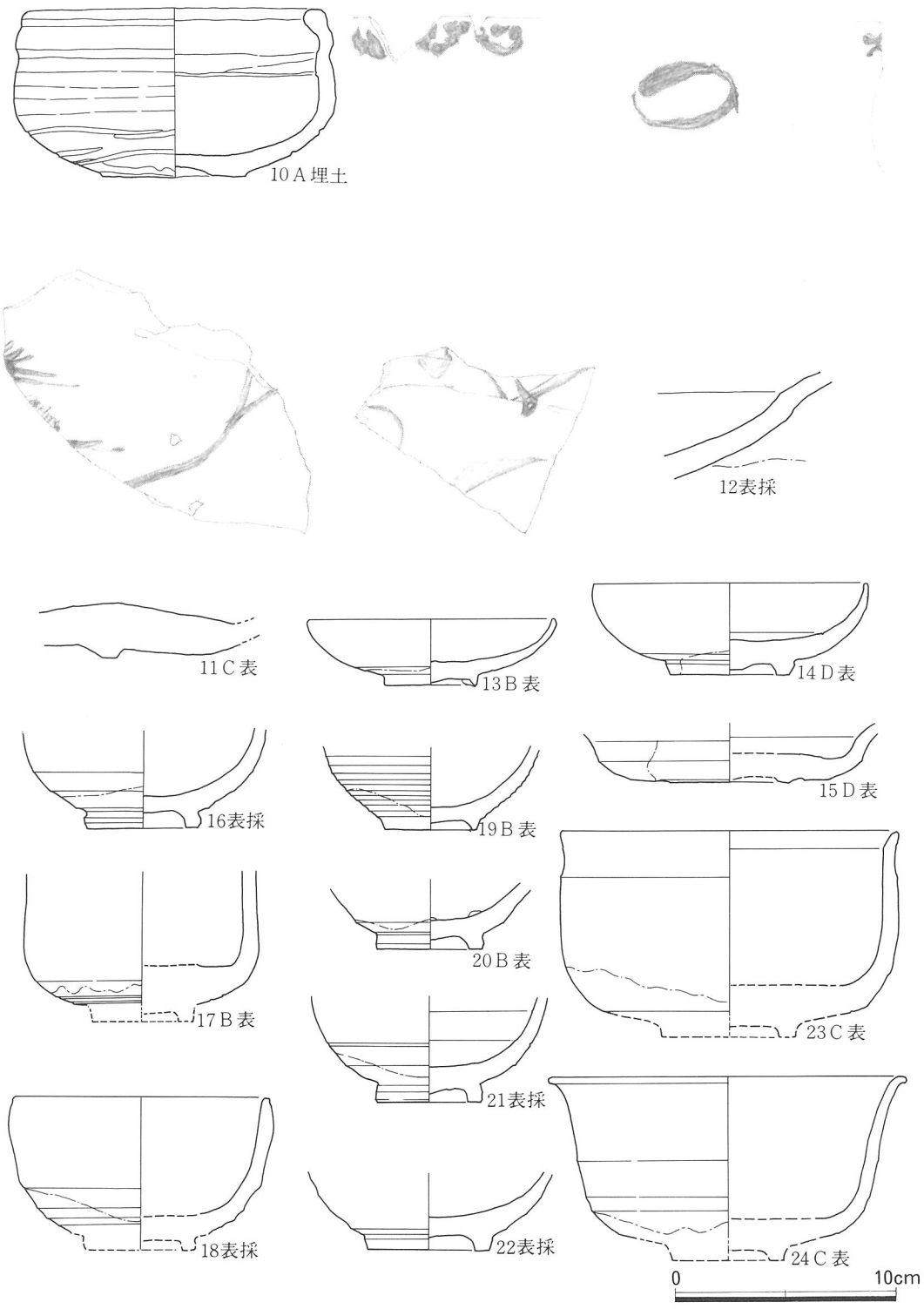


Fig.8 出土遺物実測図・鉄絵皿・鉢・碗($\frac{1}{3}$)

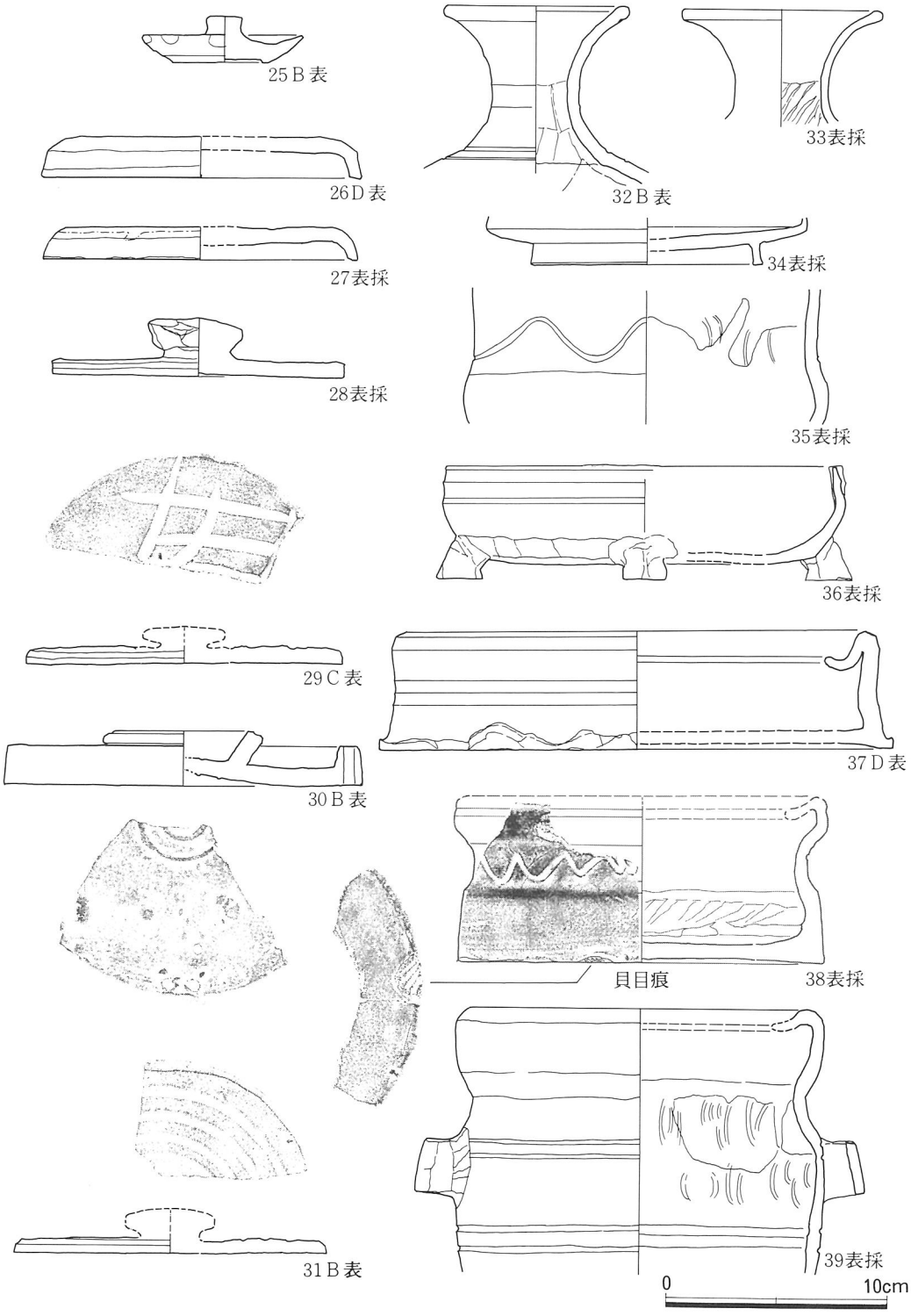


Fig. 9 出土遺物実測図・蓋・徳利・脚付鉢・水指($\frac{1}{3}$)

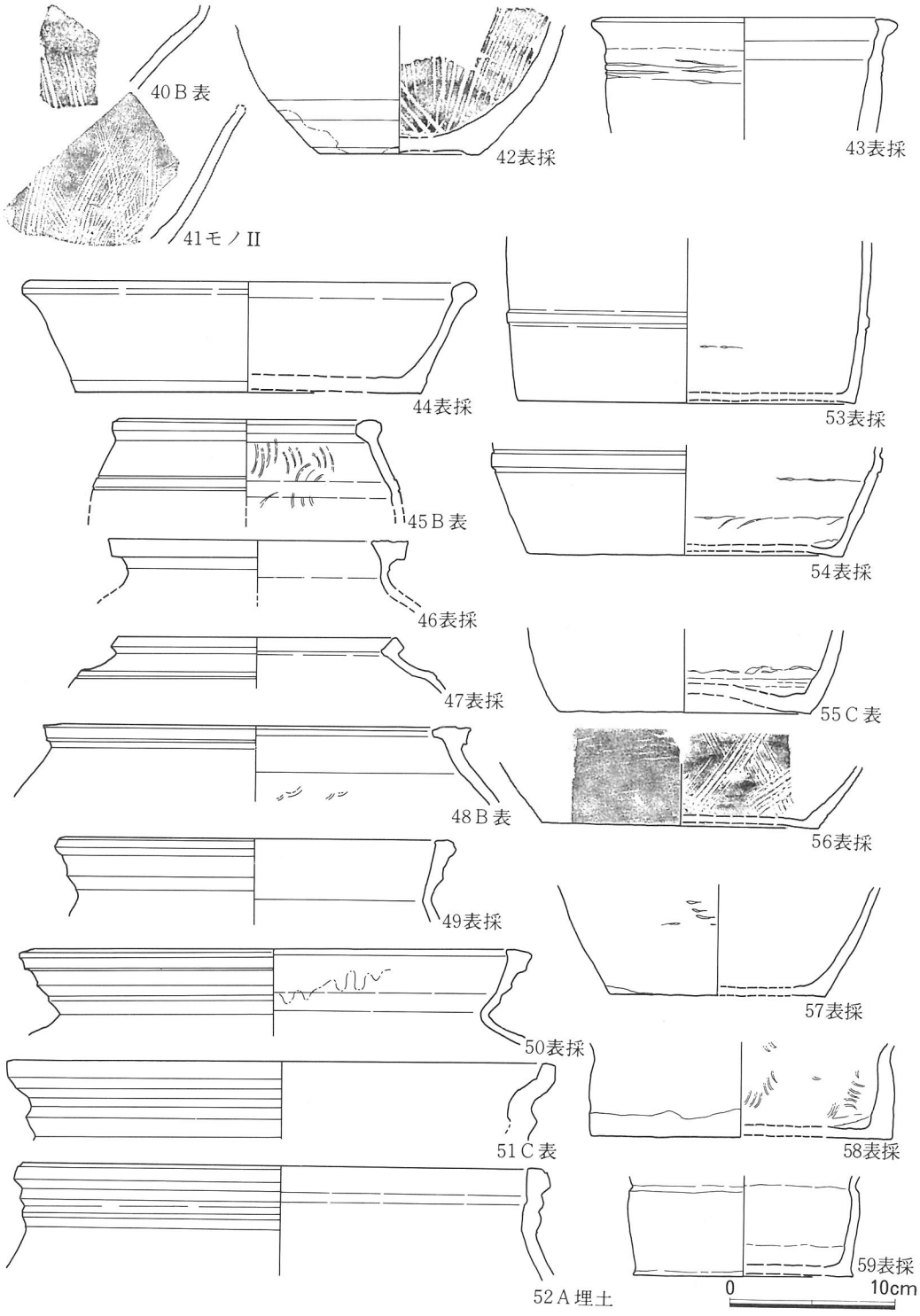


Fig.10 出土遺物実測図・擂鉢・鉢・壺・甕・底部(1/4)

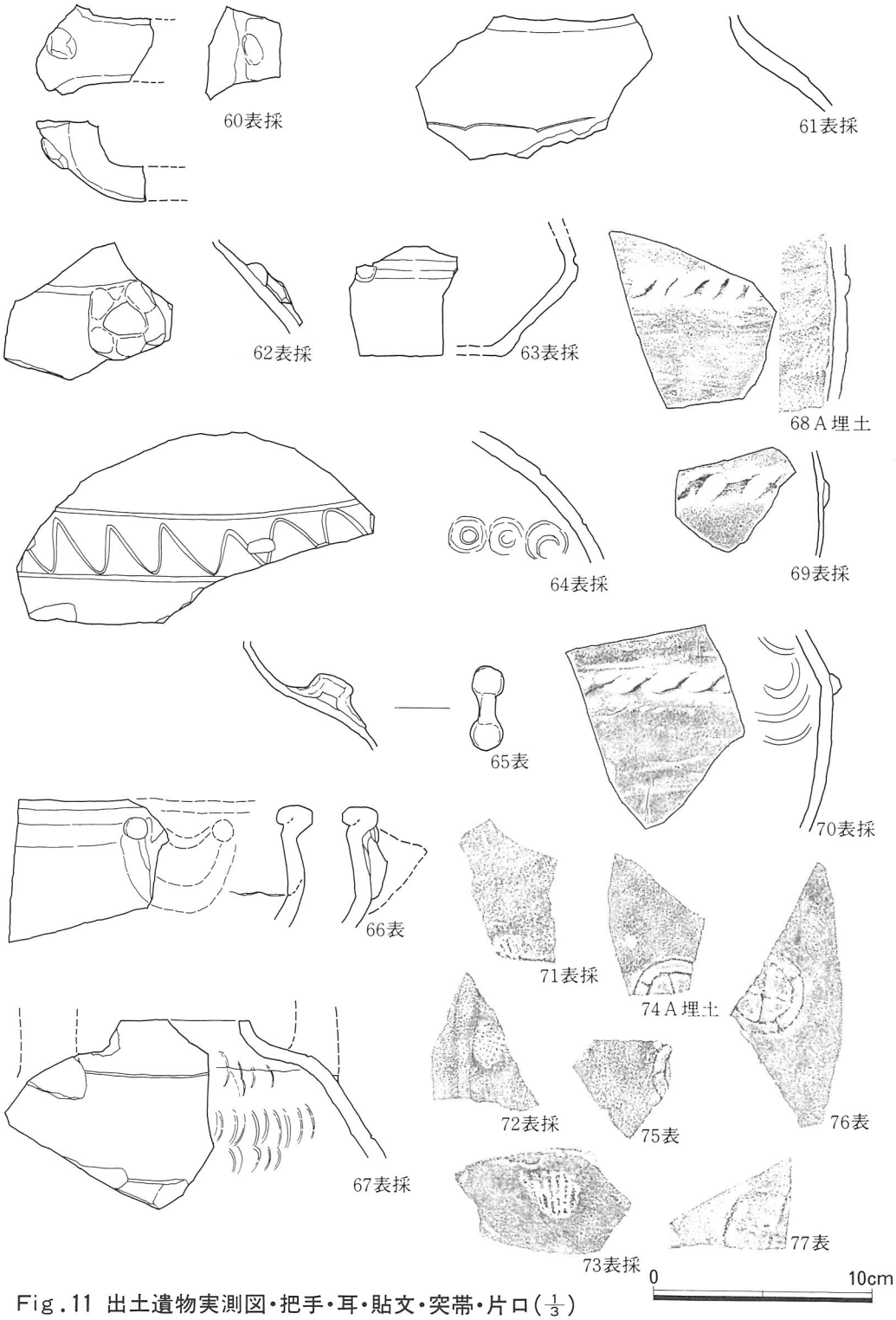


Fig.11 出土遺物実測図・把手・耳・貼文・突帯・片口($\frac{1}{3}$)
底部拓影(71～73貝目・74～77陽印)

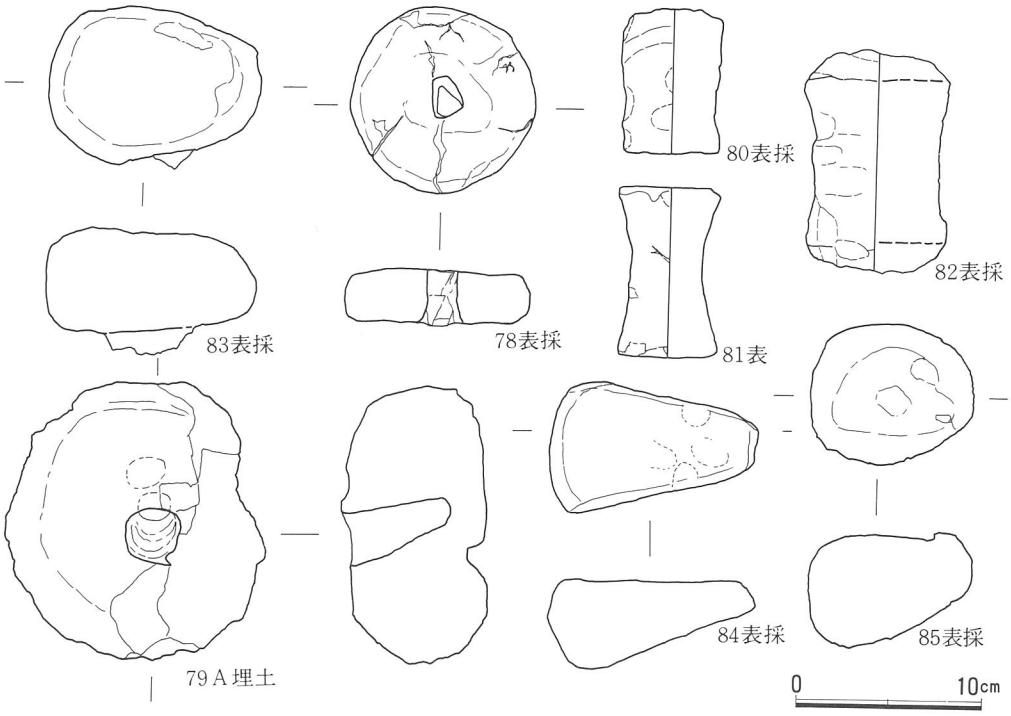


Fig.12 出土遺物実測図・窯道具（$\frac{1}{4}$）

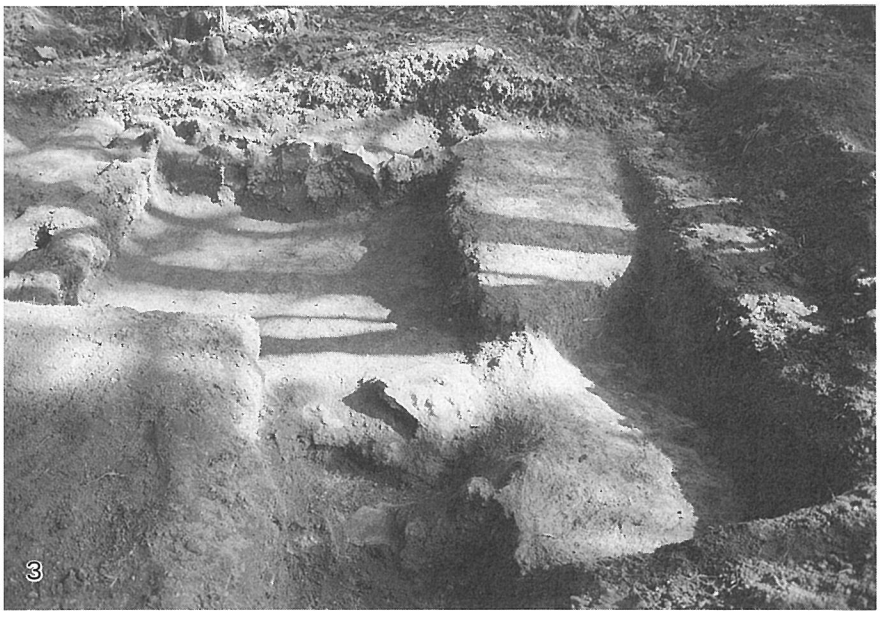
1 焼山上・中窯跡遠景
（北から）
右 焼山上窯跡
左 焼山中窯跡

2 調査区全景（西から）

3 Aトレンチ全景（東から）

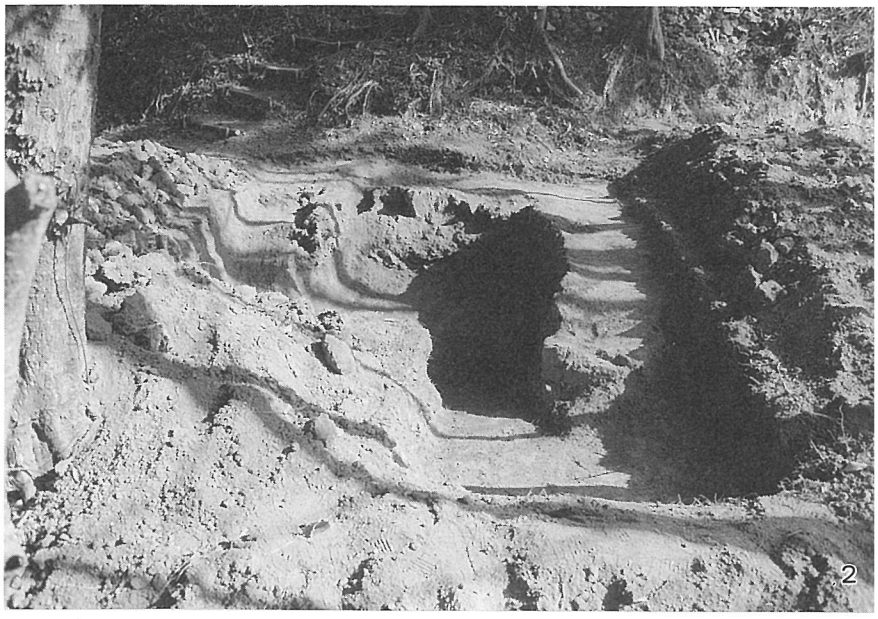
1 Aトレンチ全景（北から）

2 J室奥壁状況（西から）



3 Bトレンチ全景（西から）

1 Bトレンチ全景（東から）



2 Cトレンチ全景（西から）

3 A室奥壁状況

焼山上窯跡出土遺物　数字は実測図の通し番号に対応する（縮尺不統一）

Ⅳ．焼山中窯跡の調査

１．遺跡の概要

焼山中窯跡（やきやまなか）は、伊万里市大川町川原字辻5493番地に所在している。

焼山上窯跡の位置する丘陵から谷を隔てた東方に、標高100ｍほどの丘陵が南東から北西に向かって伸びている。窯跡はこの丘陵の標高45～54ｍにわたって丘陵主軸に沿って北西から南東に向かって登っている。窯跡推定地は他の窯と同様に多くの盗掘坑が散在し、ほとんど遺物は散布してない。

２．調査の概要

窯跡推定地には窯壁片や最上位から中位にかけて幅１～２ｍの逆L字形の斜面があり、これを築窯に伴う地山整形の跡と推定した。これにより窯跡の上位範囲や方向を予測することができた。また、下位には山道が丘陵を横切っており、その法面に窯跡の遺構や焼土が検出されないことから、下位の窯跡範囲はこの山道より上位に位置することが予測できた。そこで樹間を考慮して任意にA・Bのトレンチを設定した。また、物原層の有無を確認するためにCトレンチを向かって右側（谷側）の緩やかな傾斜地に設定した。

発掘の結果、上位のAトレンチでは比較的良好な残存状況であったが、下位は後世の開墾によりかなり撹乱を受けておりその残存状況は良好ではなかったが、胴木間（A室）は覆土が厚く良好に残存していた。胴木間から窯尻まで推定11室の内、６室を確認することができたのは大きな成果のひとつであった。

窯室は、最初上位の窯室位置や規模が不明であったので地山整形跡のすぐ下位にAトレンチを設定した。その結果I・J室の右側壁と砂床、火床、階段状の通路と柱穴を検出したので、次に排水溝と窯尻の状況を確認するために上方に拡張したがK室の砂床痕跡を検出しただけで排水溝は検出できなかった。次に下位の窯室規模と位置を確認するために、Bトレンチを任意に設定した。その結果A室（胴木間）の右側壁、奥壁、床面とB室・C室の砂床、火床痕跡を検出した。次に物原層の有無を確認するためにCトレンチを設定した。深さ65cmで地山面に達し、土層はⅣ層に区分出来たが上位Ⅲ層は撹乱層で、その層中から多くの窯道具（ハマ）と少量の陶片が出土したが、Ⅳ層の焼土層からはほとんどハマしか出土しなかった。

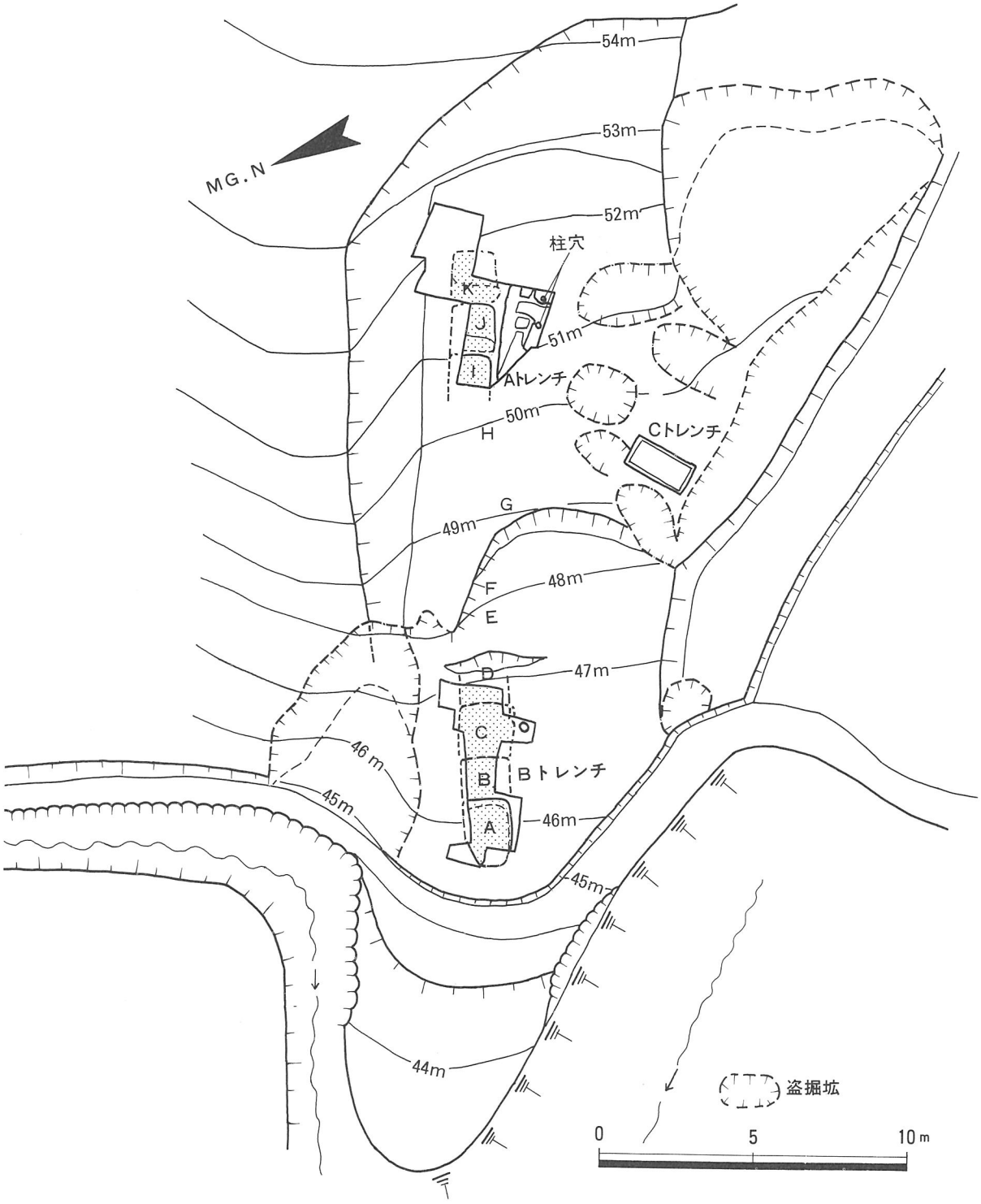
３．遺構の概要

当窯跡も、上窯跡と同様に雑木林に立地し、盗掘跡が全体に散在しており、物原推定範囲は壊滅的な盗掘を受けていた。

検出された遺構には、階段状登窯の推定11室の範囲のうち６室分があり、下位の窯室からA・B・C・I・J・K室の呼称を付した。

A・I～K室では壁面・床面・火床・横焚口を確認した。A室の奥壁下端からK室の奥壁面下端までの水平距離は19.05ｍ、窯体の傾斜角はB～C室間で約14°I～K室間で約20°である。

この窯跡の主軸はE－21°－Sで直線状に北西から南東に向かって登る。今回の調査では窯体



Fig．1 焼山中窯跡地形図(1/200)

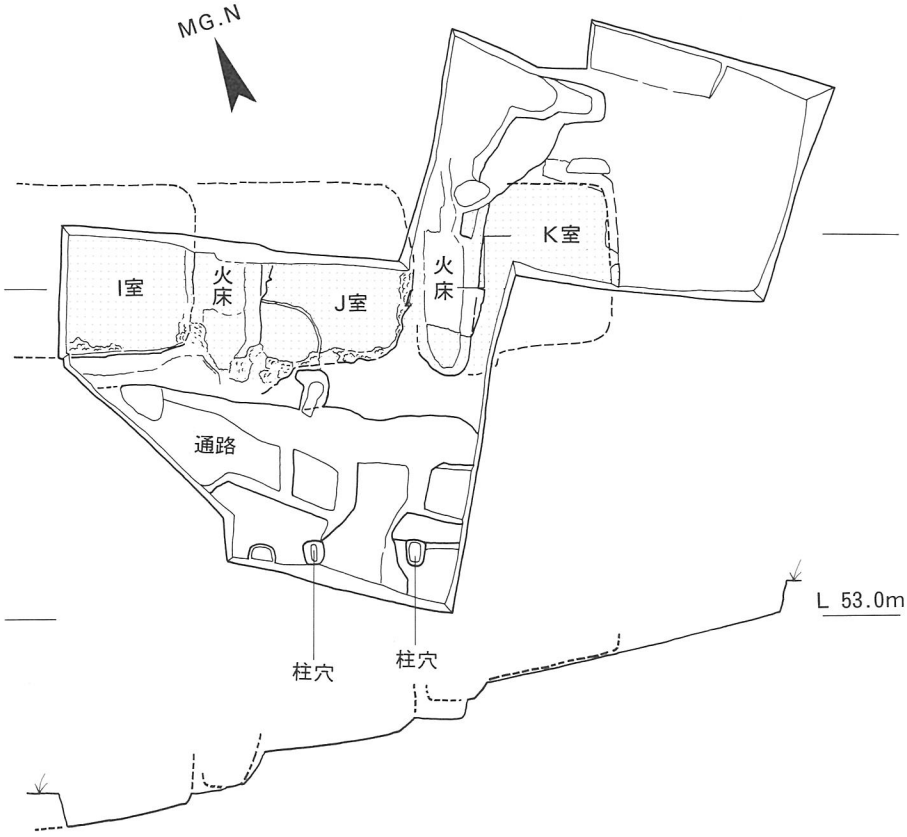


Fig.2 Aトレンチ遺構実測図($\frac{1}{60}$)

のほか通路跡や覆屋の柱穴を検出したが、排水溝は検出できなかった。

窯室の規模をC室とJ室の床面積でみるとC室が2.35㎡、J室が2.13㎡であり、下位から上位にかけてほぼ同似法量の窯室であることがわかる。C・J室の奥行と幅の比は1：0.96～1：0.8で主軸方向に長い長方形の平面形をしていることがわかる。壁面はすべて塗り壁で造られている。砂床はB・C室で火前から奥壁に向かって高くなっており、図上復元すると、ともに約11°でJ・K室で約11°と12°である。火床はJ室で検出し奥行は40cm、深さは24cmで、火床境はない。J室では側壁より17cmほど出る横焚き出入兼用口を検出した。通路と柱穴はI～K室の右側で検出した。通路の幅は底面で40cmで15～20cmの差で4段の階段状である。柱穴は20×10cmの隅丸方形で深さ約13～15cmである。物原範囲は地形や横焚口の方向から窯体に向かって右側一帯である。

各窯室を同上復元するとA室は平面形が卵形をしており幅1.7m、奥行2.3mで奥壁残存高は45cmで灰黒色。床面は約7°の傾斜で火前から奥へ高くなっている。B室はやや横に長い方形で幅1.55m、奥行1.4mである。奥壁残存高は11cmで砂床は約11°の傾斜角でつくられてい

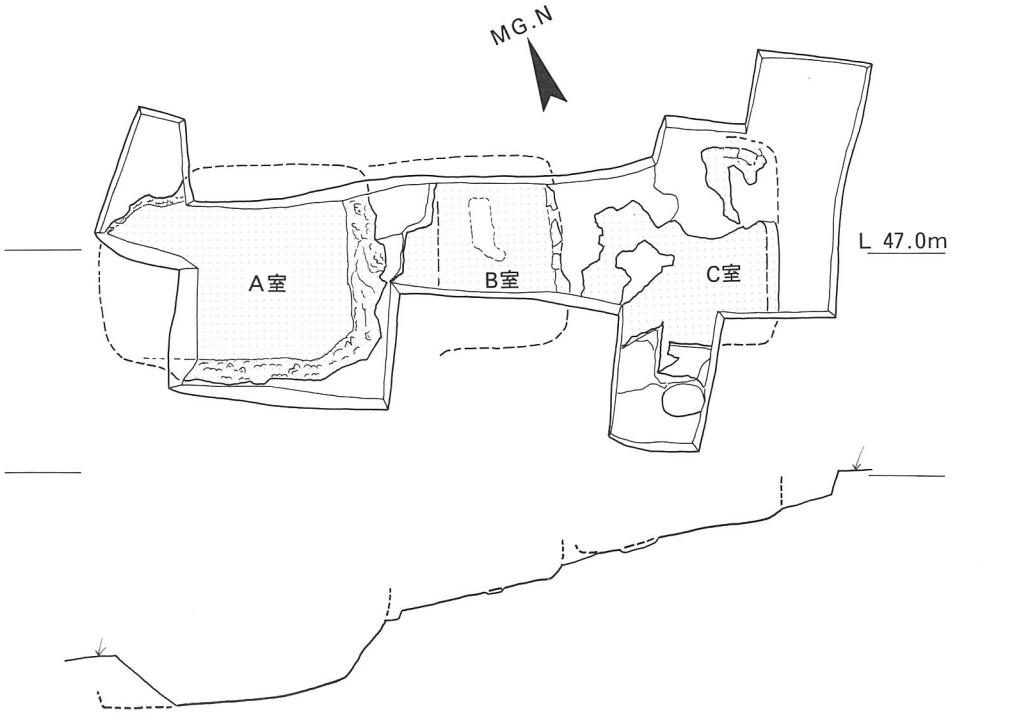


Fig.3 Bトレンチ遺構実測図(1/60)

0 1 2m

た。C室は縦に長い方形で幅1.51m、奥行1.6mである。砂床は一部分残存し約11°の傾斜角でつくられている。B・C室とも火床は撹乱を受けており不明である。J室は幅1.3m、奥行1.64mで縦に長い方形で、奥壁残存高10cm、砂床は傾斜角約11°。ここでは右側壁より外に20cm出る横焚口を検出した。

4．遺物の概要

出土遺物には陶器と窯道具がある。窯道具にはトチン・ハマ・火覗き穴の蓋があり、ほとんどCトレンチⅠ・Ⅱ層からの出土である。1～4は口径11.5～12.2cmの小皿。1は長石釉、ほかは土灰釉で暗緑色をしている。5は器高6.2cmの黄緑色の碗である。6は口径21.2cmの矢筈口水指、土灰釉である。7は底径14cm。暗緑色の土灰釉の鉢底部。8は口径29cmの波状口縁の鉢で、平面形も輪花形に造られている。土灰釉だが焼成不良で黄褐色。9は飴釉の把手。10は方形をした火覗き穴の蓋。11、12はハマ。13、14はトチン。10～14ともに成形のための指跡が多く残る。

5．小結

当窯跡は、丘陵の先端、標高45～54mに位置し、丘陵主軸に沿って北西から南東に向って登る階段状の登窯跡で推定水平全長は20.05m、平均勾配は20°で11室ほどの規模の窯である。今回6室分の範囲を検出した。また、この窯に付属する覆屋の柱穴や通路の階段状遺構を検出した。物原は地形・横焚口通路の位置から窯主軸に向かって右側一帯の谷斜面である。この窯の操業期は窯構造や出土した資料から16世紀から17世紀初頭頃と考えられる。

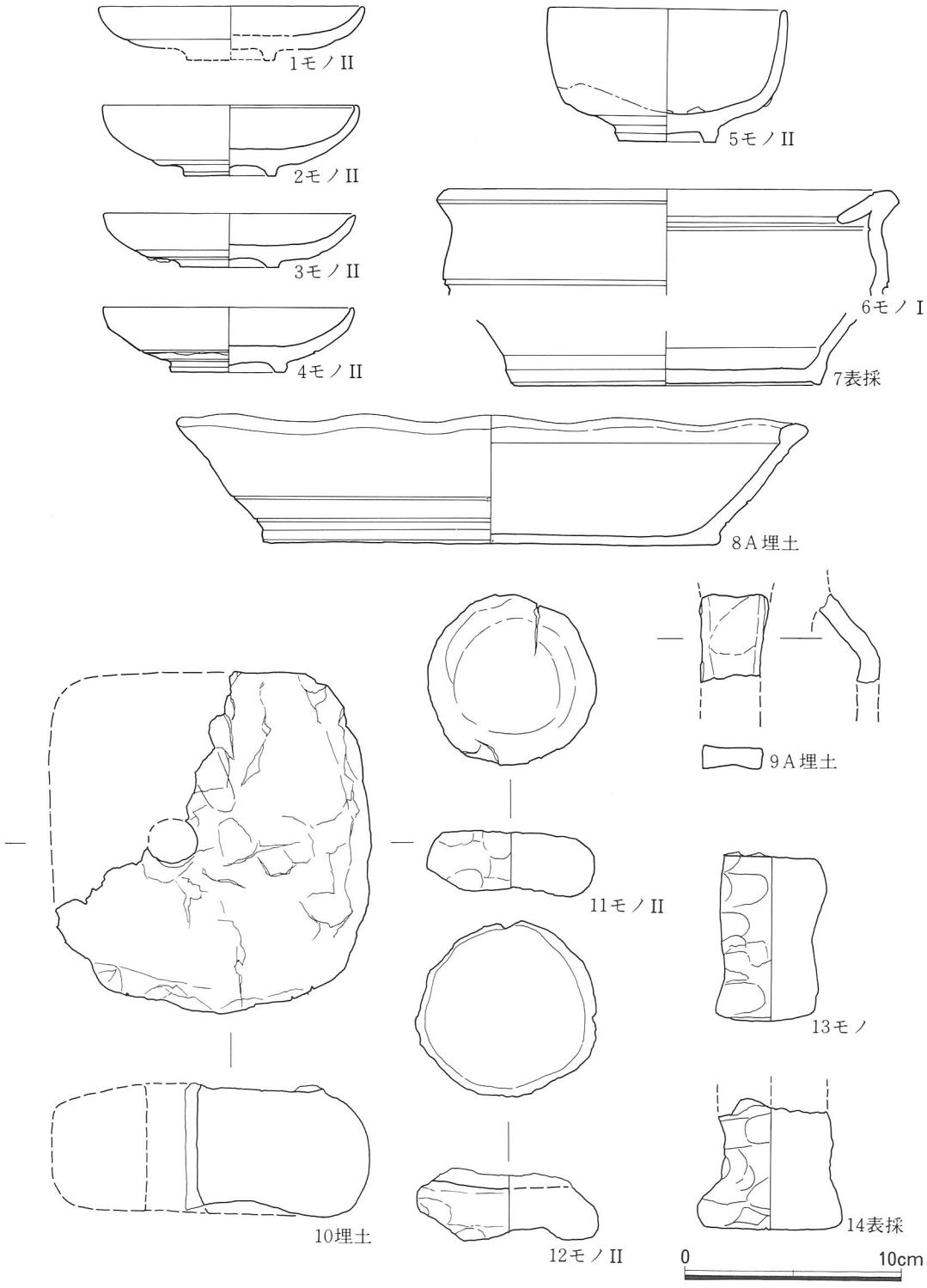


Fig.4 出土遺物実測図(1/3)

1 調査区全景（西から）

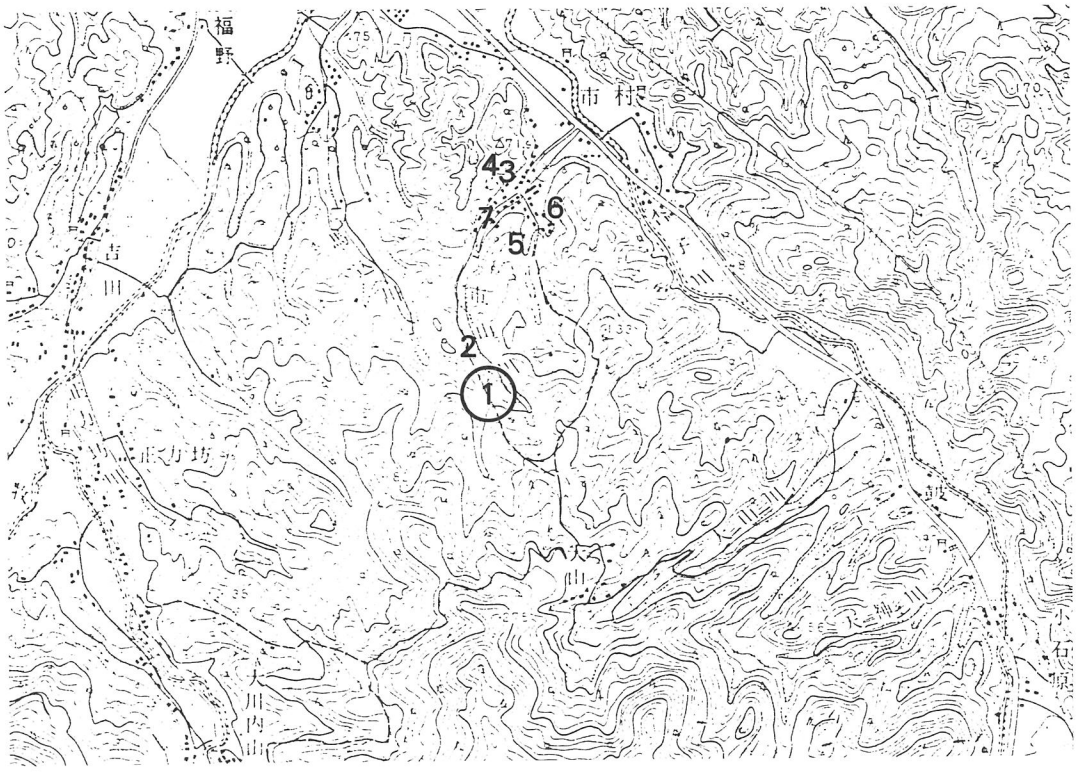
2 Aトレンチ全景（西から）

3 Bトレンチ全景（西から）

1　I室側壁状況（北から）

2　J室砂床状況（北から）

3　A奥室壁状況（西から）



Fig．1 周辺窯跡分布図（$\frac{1}{25,000}$）

① 市の瀬高麗神上窯跡　5 東の谷窯跡
2 市の瀬高麗神下窯跡　6 清水各窯跡
3 市の瀬新窯跡　7 竹下窯跡
4 火の谷窯跡

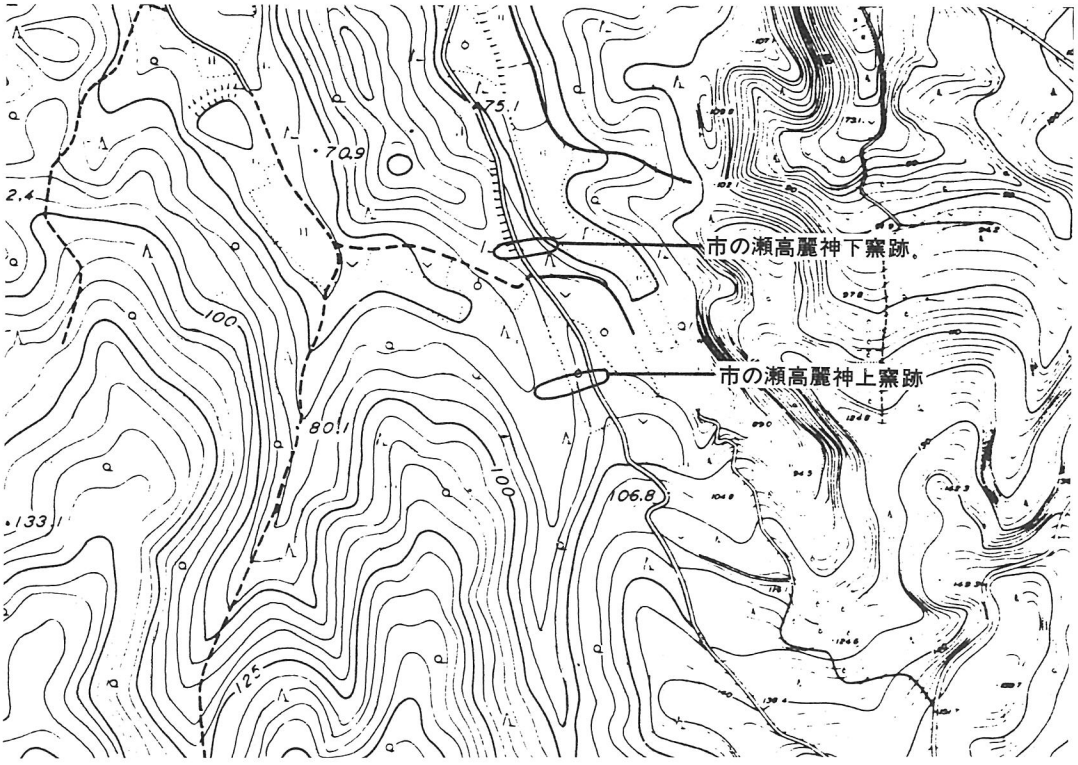
Ⅴ．市の瀬高麗神上窯跡の調査

1．立地の環境

市の瀬高麗神上窯跡[註1]は、伊万里市大川内町谷馬米―4204番地イ、ロに所在している。大川内町は、伊万里市域の南端に位置する地域で、南には標高599mの青螺山を主峰とする山塊が位置し、山内町との境をなす。西には黒曜石の原産地として著名な標高487mの腰岳が位置している。青螺山系を源とする杏子川が町域の東辺を北流して伊万里湾へと注ぎ込んでいる。

現在、大川内町は農業と窯業の盛んな地域であるとともに、桃山時代末期から江戸時代にわたる多くの窯跡[註2]が散在するところでもある。中でも町内の大川内山と市の瀬山には多数の窯跡があり、この二地域は今でも市内の中心的窯業地として伝統を活かした地場産業としての伊万里焼などの生産が盛んである。

当窯跡の位置する市の瀬山は、杏子川が伊万里川と合流するところから南方約800mにあり、杏子川の支流である市山川により刻まれた東西の谷地、標高40～60mに立地する。



Fig．2 市の瀬高麗神上窯跡周辺地形図($\frac{1}{5,000}$)

集落内には、市の瀬新窯跡・火の谷窯跡・清水谷窯跡・東の谷窯跡・竹下窯跡がある。

青螺山塊から北に向かって標高100mほどの丘陵地形が発達している。窯跡は、市山川により刻まれた南北にのびる丘陵の鞍部標高90mほどのところに位置している。

註1．当窯跡の北方約50mほどのところに丘陵主軸に直交する状況で東から西に向かって登る窯跡がある。焼造品の内窯は、ほとんど同じであるところから同時期と考えられる。この窯跡を市の瀬高麗神下窯跡とし、今回調査で所在を確認した窯跡を市の瀬高麗神上窯跡とし、名称を区分して付した。

註2．「市内古窯跡分布調査報告書」伊万里市教育委員会1984

2．遺跡の概要

市の瀬高麗神上窯跡は、これまで下窯と区別されることなく「市の瀬高麗神窯跡」として認識されていた。この窯跡も市内の多くの窯跡と同様に所在地や窯体の構造、規模、焼造品の内容、構成などはまったく不明であった。

窯跡は南から北に向かって伸びる丘陵の鞍部の西傾斜面、標高81mから89mにかけて位置し、西側と南側は小さな谷で周囲と隔てられている。現在窯跡は2mほどの段差で上下三段にわたって開墾されており、現状ではその所在さえ疑わしい状況であったが、法面に散在する盗掘坑や陶片から辛うじて窯跡であることが判明する状況であった。

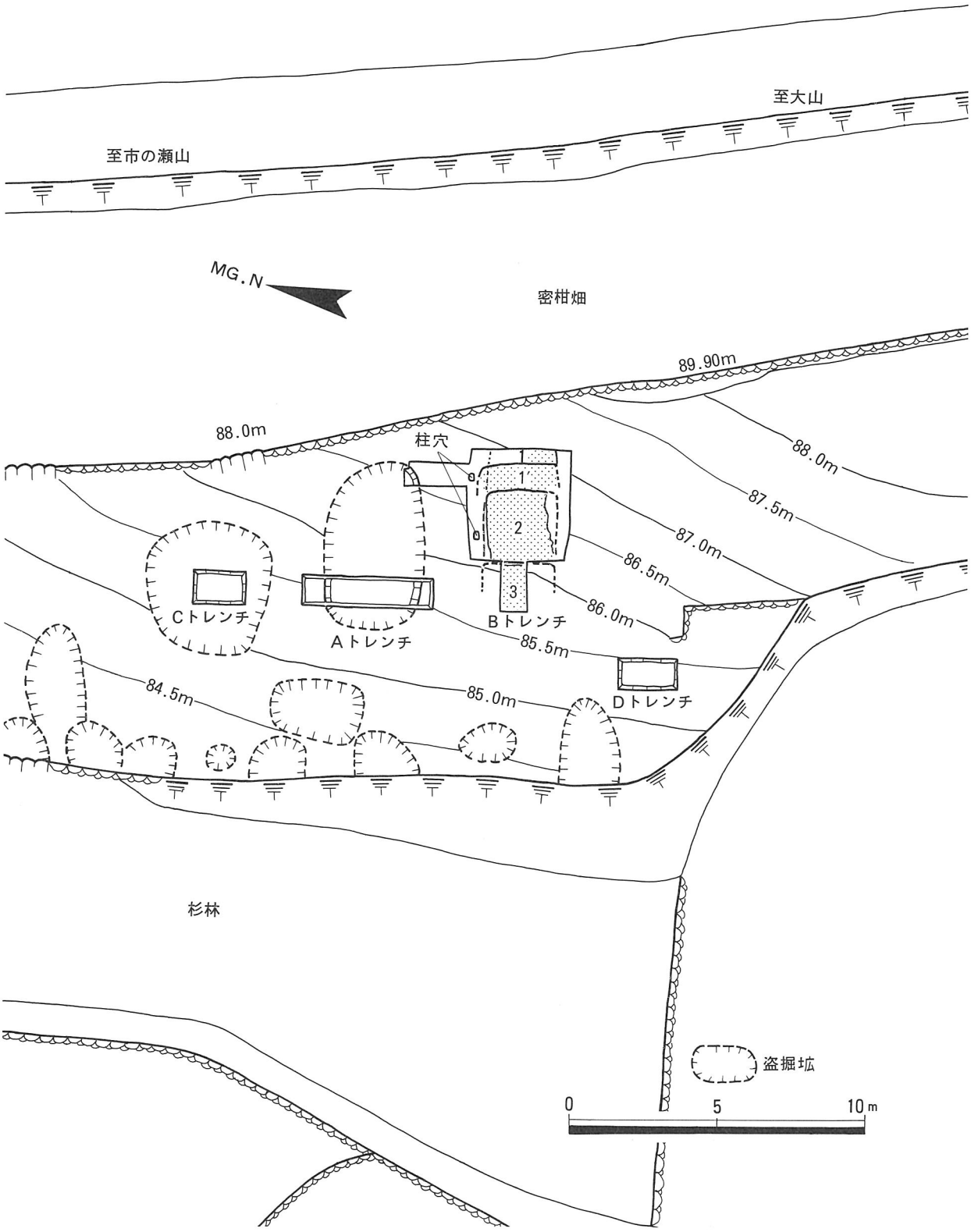


Fig.3 市の瀬高麗神上窯地形図($\frac{1}{200}$)

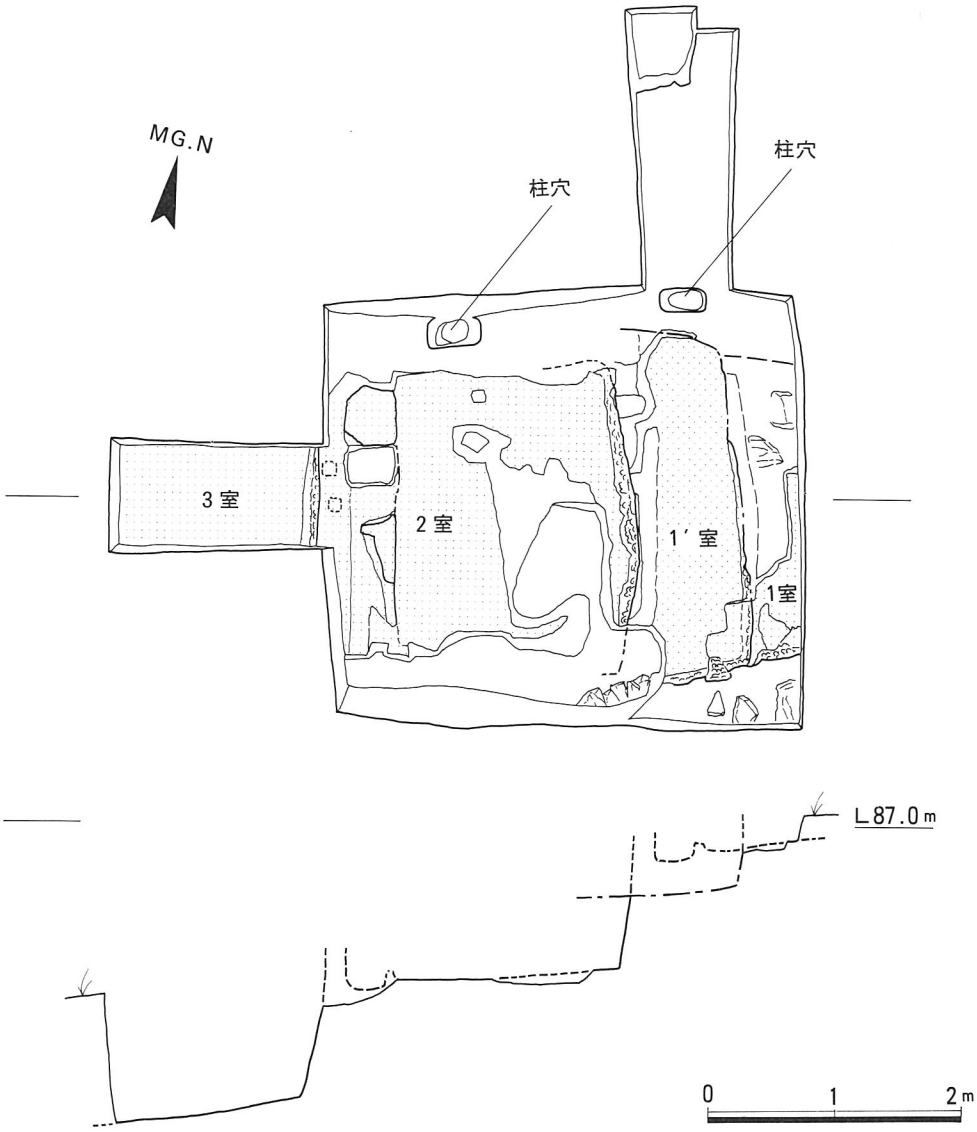


Fig.4 Bトレンチ遺構実測図(1/60)

3．調査の概要

調査は窯体の位置、規模、焼造品の内容を把握する為に任意にトレンチを設定して実施した。

現況ではまったく窯体の位置は想定不可能であったので、位置の確認のために1×4.5mのAトレンチを設定したが盗掘坑を検出したにすぎない。その後3×3mのBトレンチを設定した。その結果、2室の奥壁を検出したので上下に拡張し1・1′・3の各窯室を検出した。その後、物原位置の確認と焼造品の層位的変化を確認するためC・Dトレンチを設定したが、いずれも地山面まで撹乱を受けていた。

4．遺構の概要

当窯跡は、畑地（現況は荒地）に立地している。検出された遺構には、階段状登窯の窯室３室分がある。上位から１・２・３として１室と重複する窯室を１′室とした。

１′・２・３室で壁面、砂床・火床を確認した。３室の奥壁下端から２室奥壁下端までの比高差は1.02mである。この窯跡の主軸はN－78°－Eで西から東に向かっている。今回の調査では窯室のほか覆屋の柱穴２箇所を確認した。

窯室の規模を床面積でみると２室は幅2.2m、奥行2.4mで5.28㎡である。窯室は正方形に近い平面形をしていることがわかる。壁面は１～３室とも塗り壁で造られている。

１室はほとんど撹乱を受けていたが右側壁残存高は12cmであった。そのほか砂床と火床の痕跡が小範囲だけ残っていた。２室は奥壁、砂床、火床の一部が残存していた。奥壁残存高は58cm。３室は床面直上まで撹乱を受けていたが、奥壁と砂床の一部を検出した。奥壁残存高は67.5cmであった。柱穴の深さは31cmと54cmであった。１′室の奥壁残高は26cmであった。

5．遺物の概要

出土した遺物には、陶器と窯道具がある。

陶器１～17は鉄絵大皿である。81～83は無地の大皿である。鉄絵、無地ともに４のように胴部が屈曲する形態が多く、釉は長石釉がほとんどで胎土目をもつものがある。21～29は碗でほとんどが土灰釉で黄緑色。27は長石釉で灰白色、胎土目をもつ。36～62は小・中皿である。土灰釉、長石釉があり、砂土目（36～41）と胎土目（42～54・56・59）をもつものがある。30・31は袋状口縁になる鉄絵花入。18～20は鉄絵短頸壷33～35・84～86は深鉢で胴部が屈曲するもの（33・34）としない形態（84～86）とがある。32・63は片口、63は鉄絵を施す。64～66は向付で65は鉄絵を施す。66は皮鯨手の香炉で復元器高は10cmである。68～79は擂鉢。80は甕、内面に青海波文状の叩目を残す。87～90はハマ。89・90は陶片の転用品である。91～96のトチンには窯印をもつものがある。96は径12.5cm。

小　結

当窯跡は、丘陵の西斜面に丘陵主軸に直交するように西から東に向かって登る階段状連房式登窯で、今回３室と、重複する１室を確認した。物原位置は撹乱により明確でなかったが地表面の遺物散布状況から窯主軸に向かって左側と考えられる。操業期は出土資料等から16世紀末から17世紀初頭と考えられる。

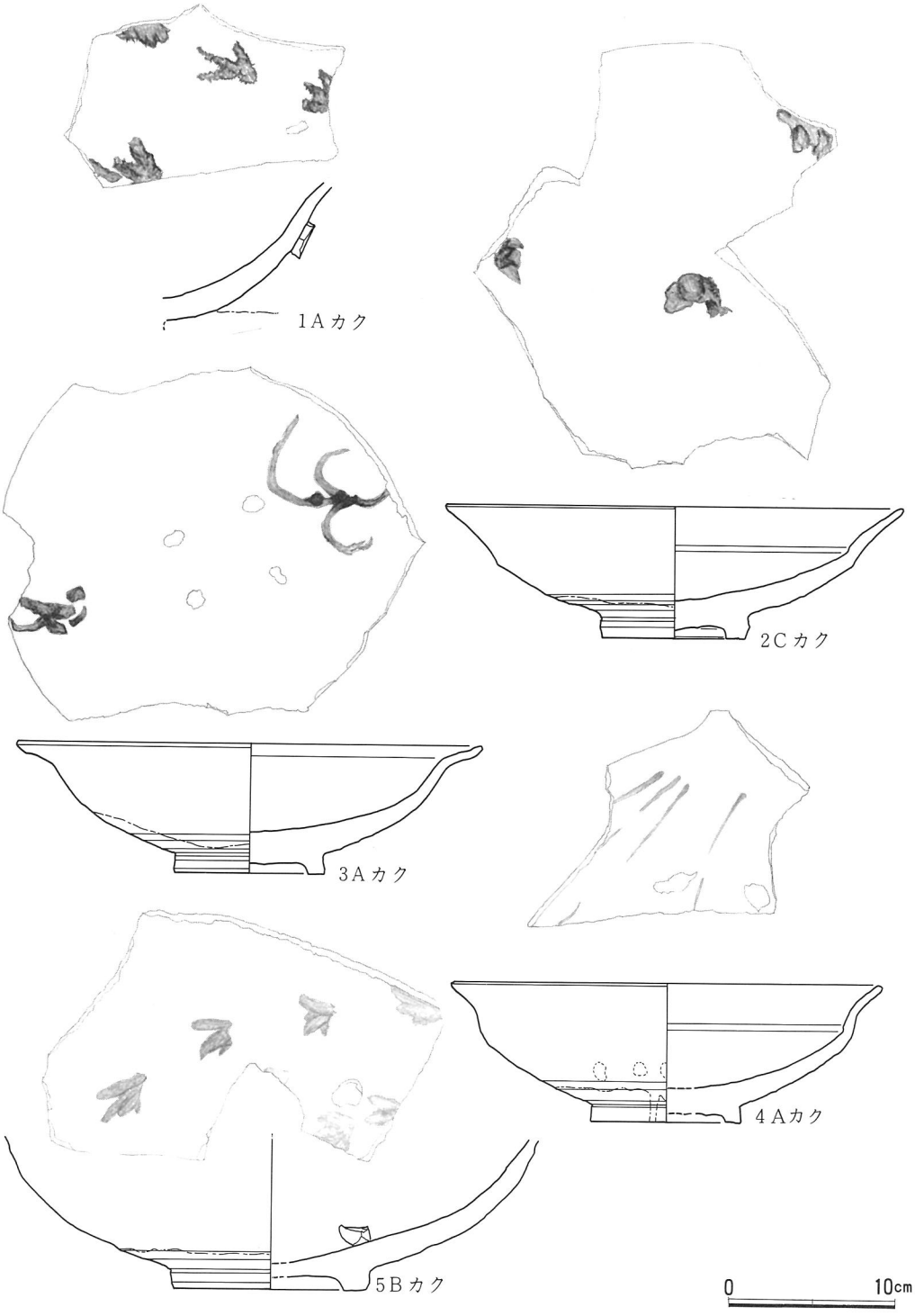


Fig.5 出土遺物実測図・鉄絵皿($\frac{1}{4}$)

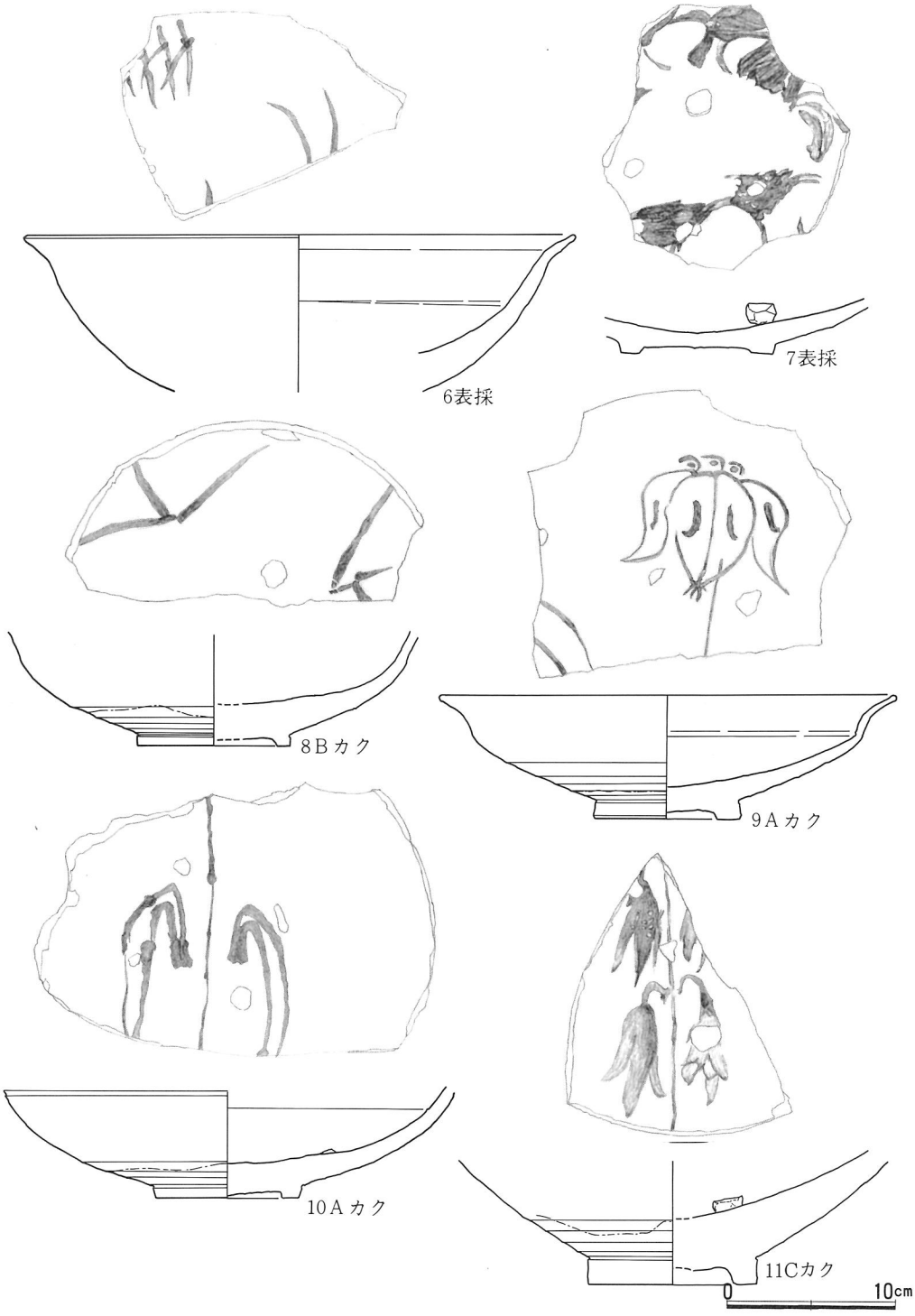


Fig.6 出土遺物実測図・鉄絵皿($\frac{1}{4}$)

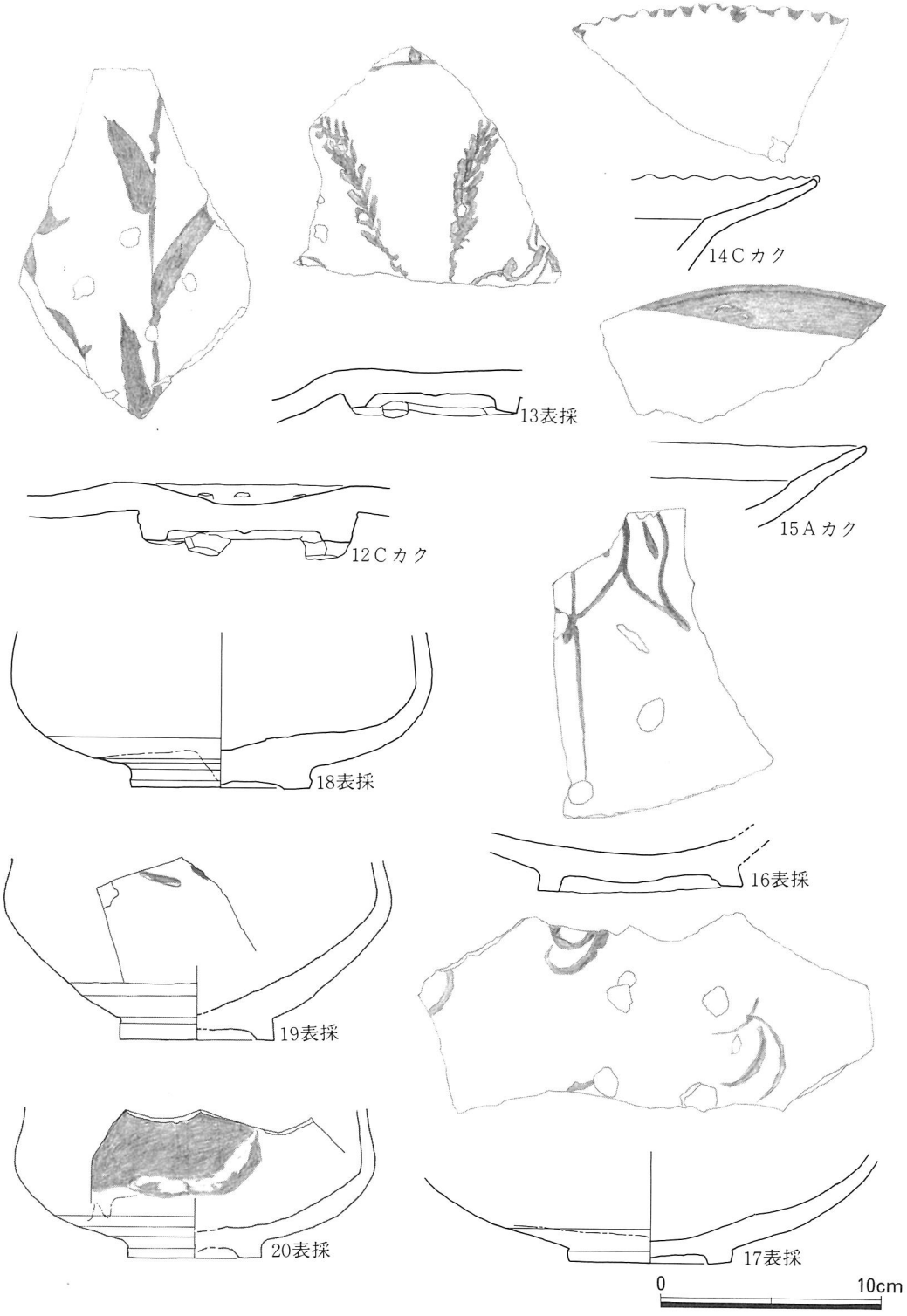


Fig.7 出土遺物実測図・鉄絵皿・短頸壺($\frac{1}{3}$)

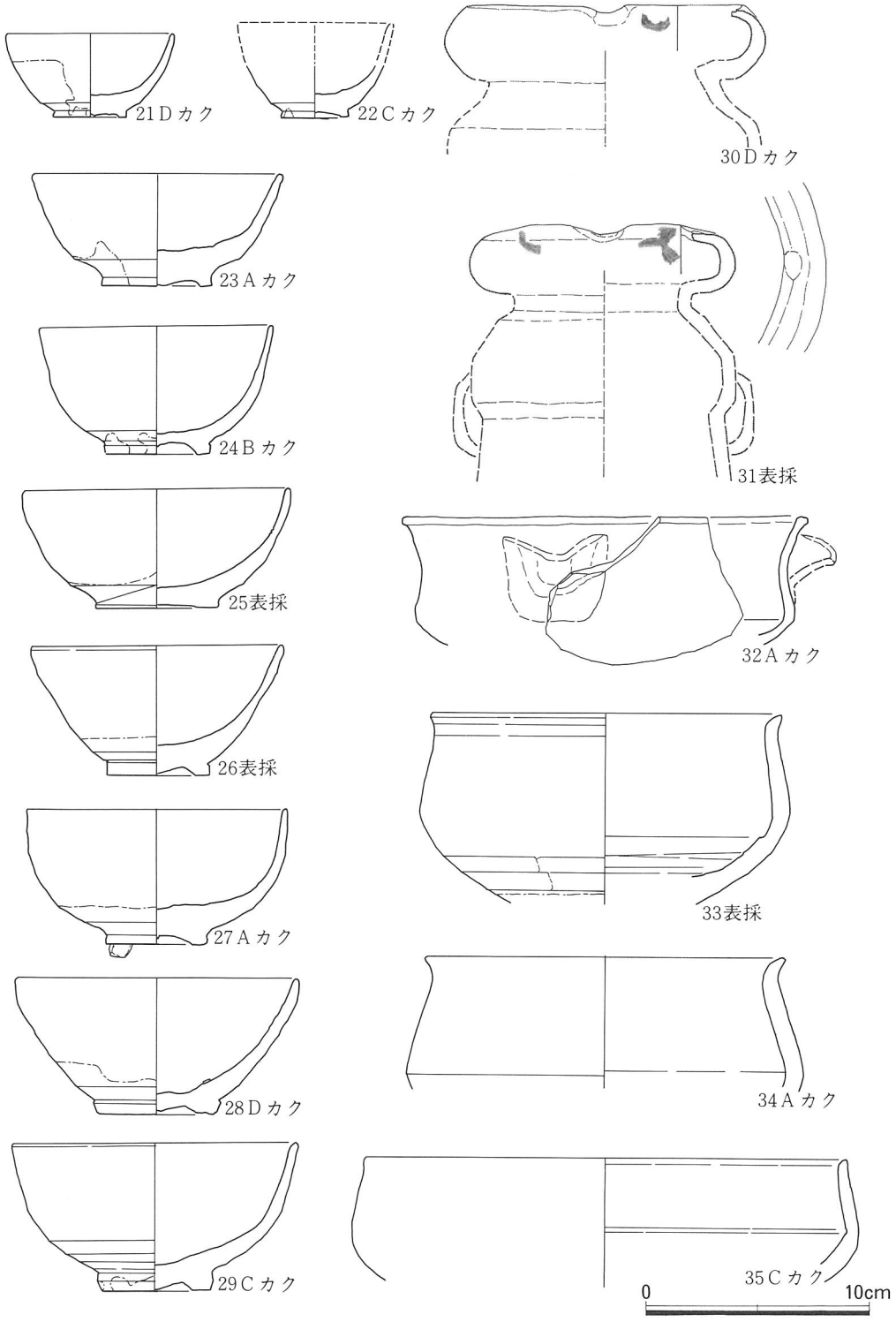


Fig.8 出土遺物実測図・碗・花入・片口・鉢($\frac{1}{3}$)

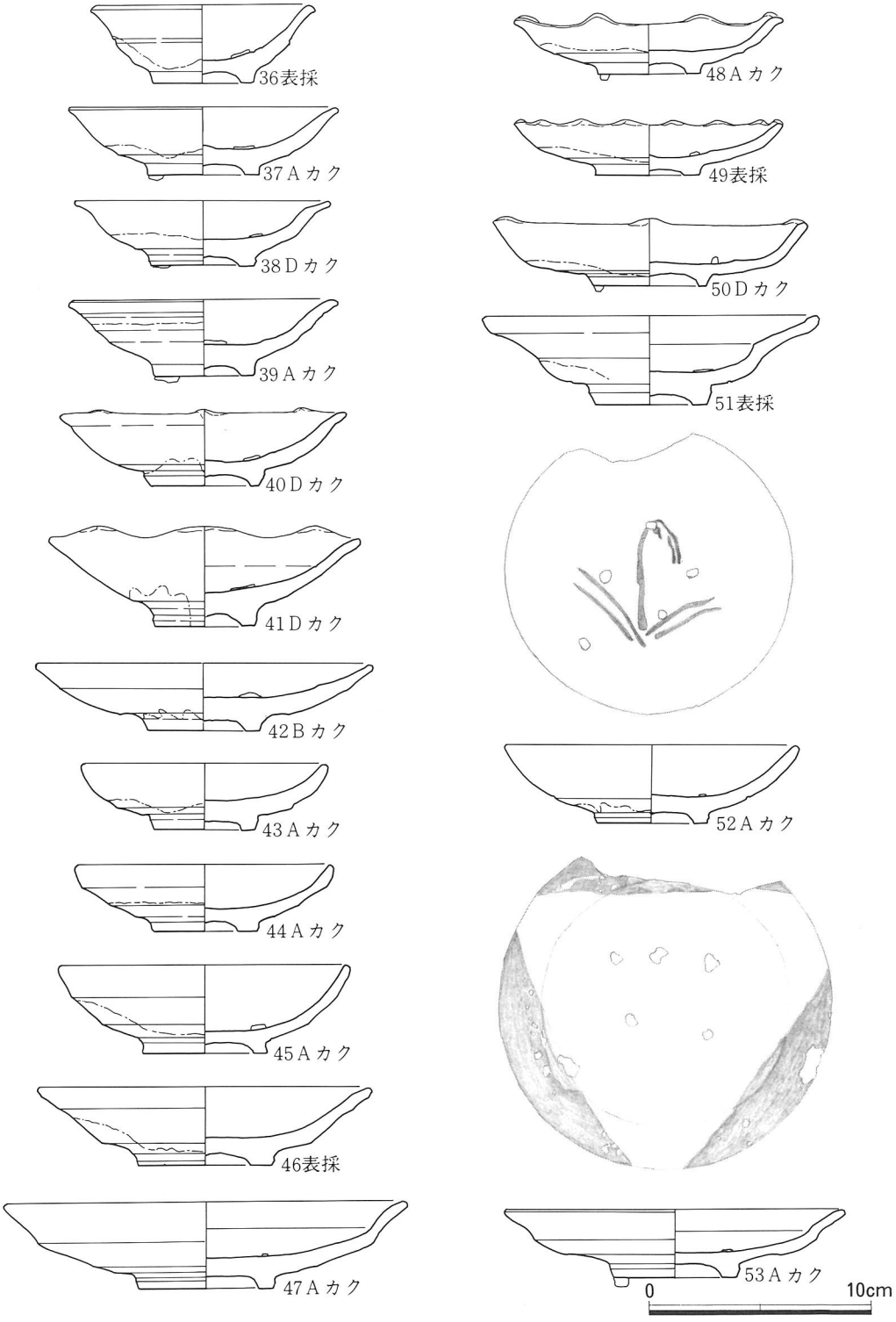


Fig.9 出土遺物実測図・皿・鉄絵皿($\frac{1}{3}$)

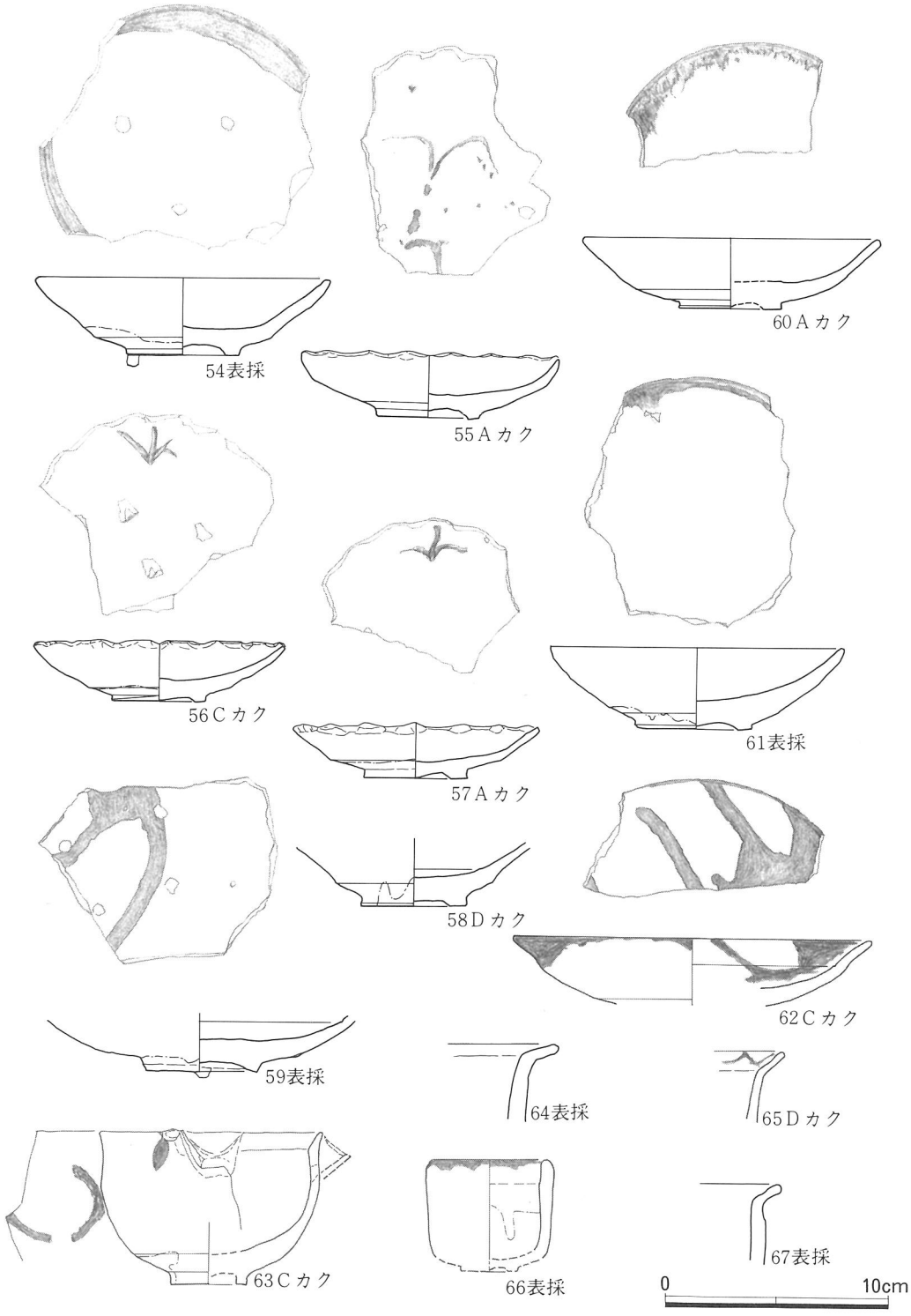


Fig.10 出土遺物実測図・皿・片口・香炉・向付($\frac{1}{3}$)

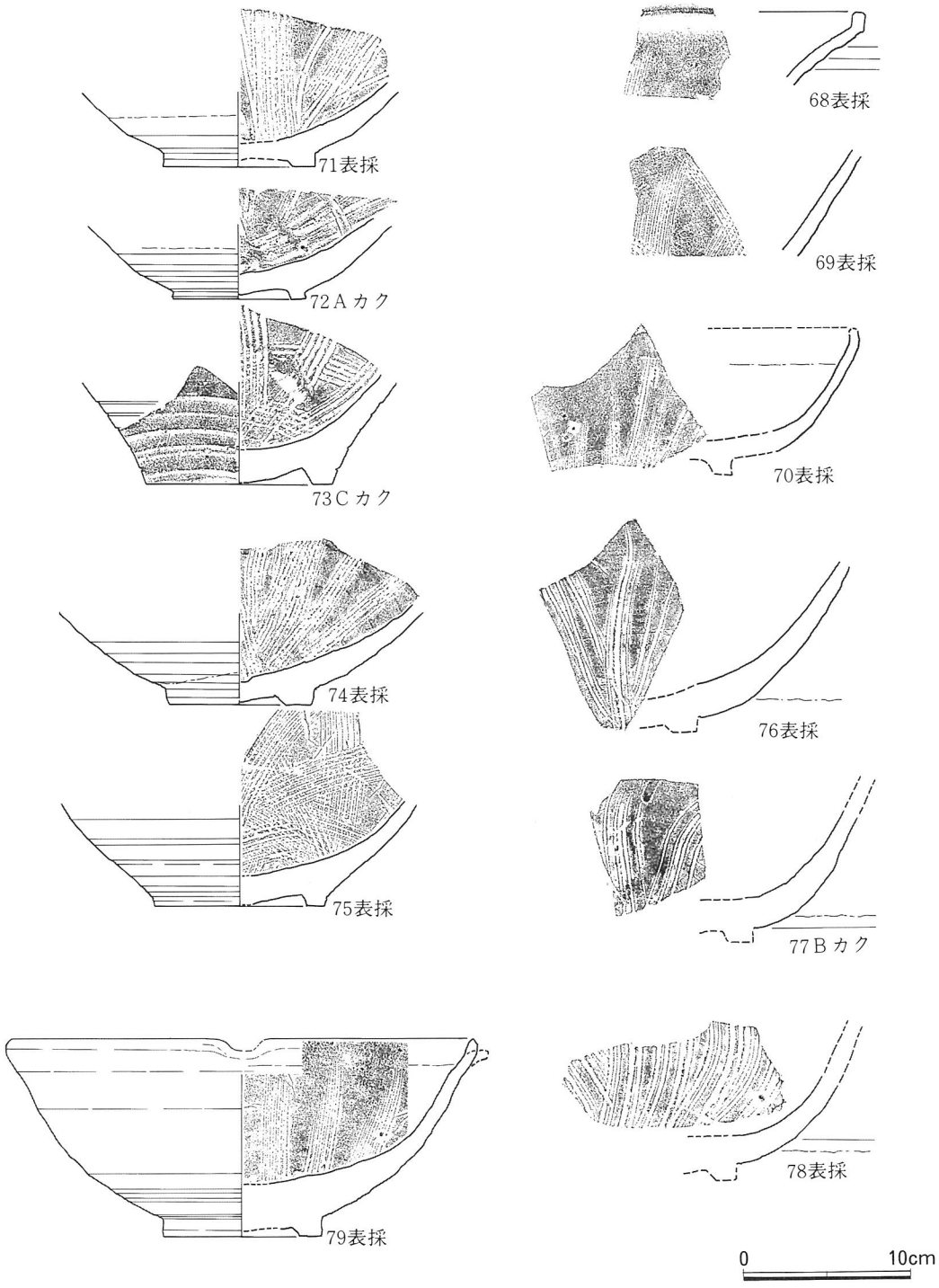


Fig.11 出土遺物実測図・擂鉢(1/4)

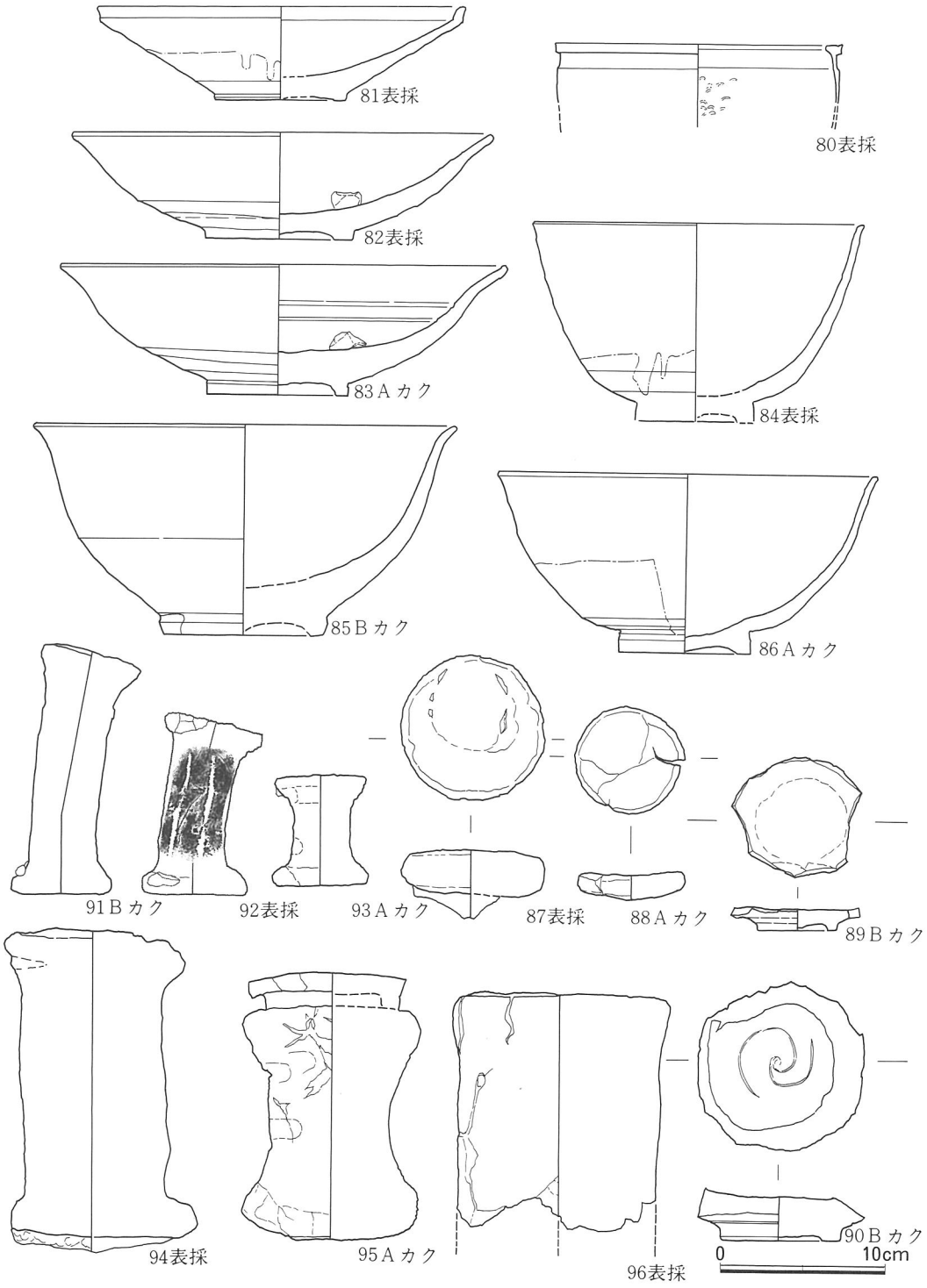
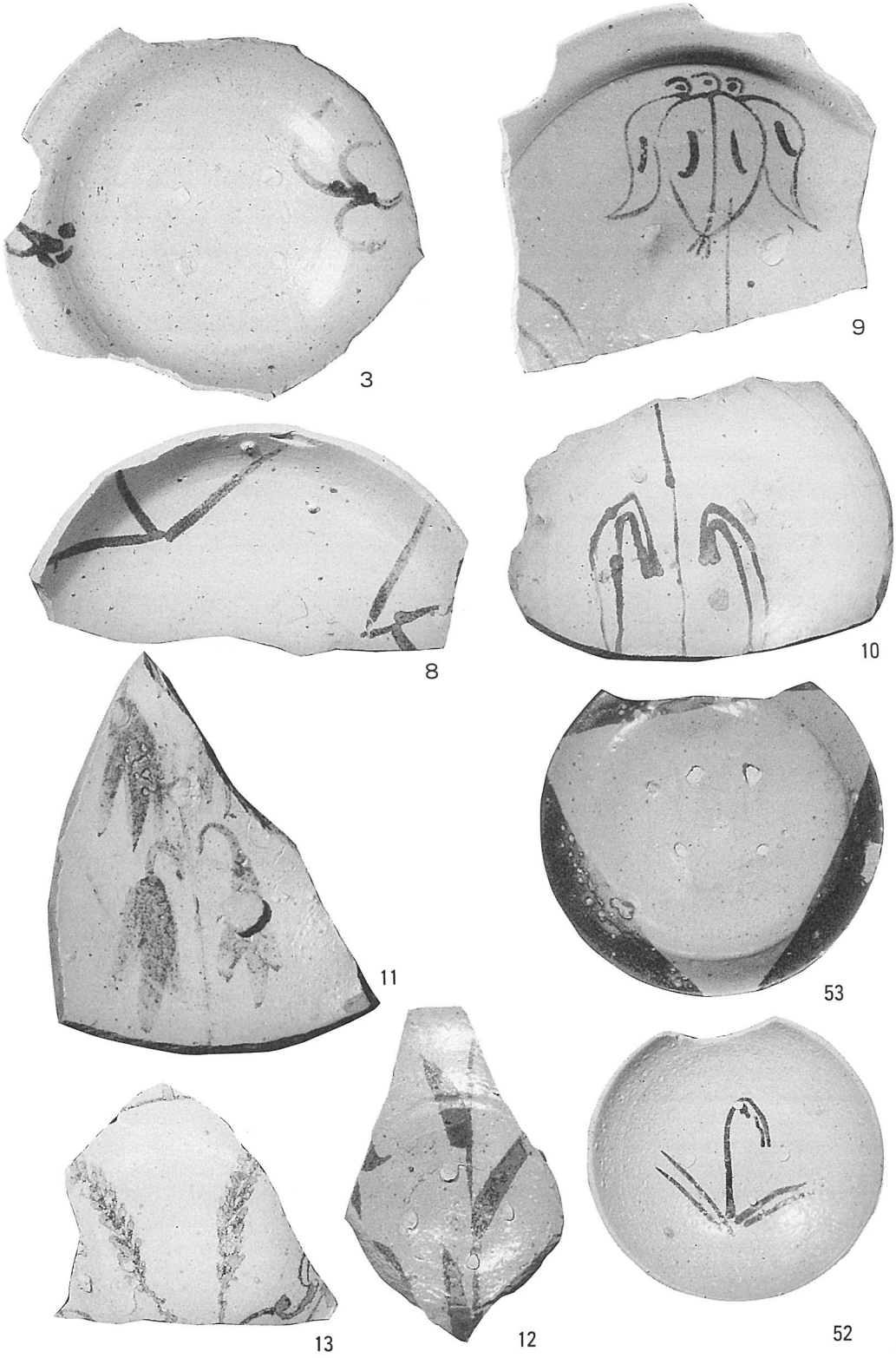


Fig.12 出土遺物実測図・皿・鉢・窯道具(1/4)
80は1/8

1 市の瀬高麗神上窯跡
近景（北東から）

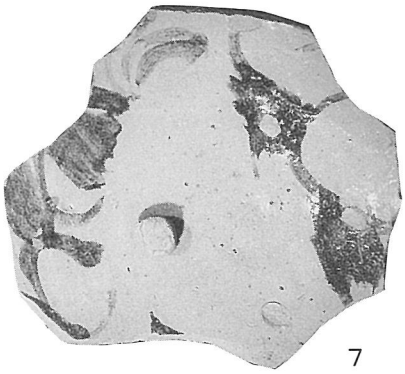
2 Bトレンチ全景（西から）

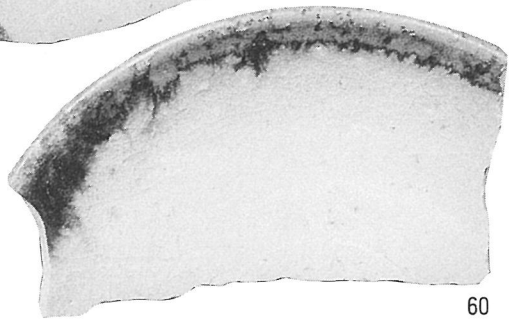
3 窯室状況（北西から）



市の瀬高麗神上窯跡出土遺物 数字は実測図の通し番号に対応する（縮尺不統一）

62


7


60

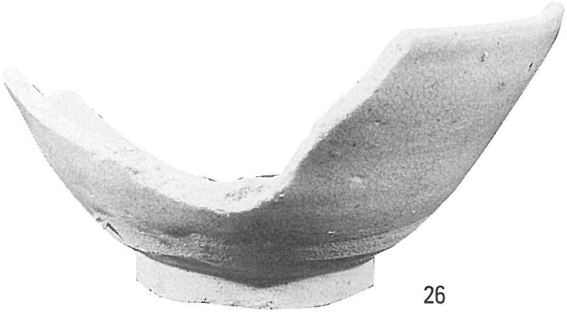
55

18

73

63

79


26

市の瀬高麗神上窯跡出土遺物 数字は、実測図の通し番号に対応する（縮尺不統一）

伊万里市文化財調査報告書第24集
金石原窯辻窯跡・焼山上窯跡
焼山中窯跡・市の瀬高麗神上窯跡
昭和63年3月31日（No.　　）
発行　伊万里市教育委員会
〒848　伊万里市立花台1丁目1番1号
印刷　三光印刷株式会社
〒848　伊万里市新天町287-3